日本、宿願の五輪出場権握る

新たな目標へ一歩踏み出す

勝った!!。日本は宿願のミュンヘンオリンピックアジア地域代表権をしっかりとその掌中におさめた。ナショナルチームの皆さん、ごくろうさま。全国の関係者、ファンの皆さん、御協力、御声援ありがとう。

ブラスバンドの勇壮なマーチにのって場内を一周する16人の若者たちの胸中に去来したものはなんであったろう――。

責任をまっとうした安ど感、苦労をともにしながら途中で去っていたかってのナショナルチームの仲間、地方合宿で声援を送ってくれた中学生の瞳。

栄光の行進に向かって降る五色のテープを払いのけようともせずむしろうつむきかげんだ。

胸をはれ日本。誰もがこう叫びたかった。

しかし、たとえ誰がこの行列に加ったとしても、静かに自分の足もとをみながらにちがいない。大事な一歩であった。貴重な一歩であった。

勝敗表

	日本	イスラエル	韓国	P	得	失
①日本	………	15—4 18—7	20—9 21—7	8	74	27
②イスラエル	4—15 7—18	………	13—15 22—15	2	46	63 (−17)
③韓国	9—20 7—21	15—13 15—22	………	2	46	76 (−30)

Pはポイント，勝ち2点引き分け1点負け0点

へき頭飾る会心の速攻

日本の出足は快調。この大会のヤマ場とみられたイスラエルとの1回戦（11月14日・東京体育館）開始50秒、ディフェンスの先頭に立った藤中がイスラエルの横パスをカットし中央を突破、右から野田が猛然と走りこむ。いいパスが渡った。野田が突き刺さるようなシュートを決めた。目のさめるような速攻である。

木野が、近森が、飯田が、有永が、本田がコート上で一斉に手を叩いた。とびあがった。

速いプレーを身上とする日本がへき頭で会心の一発を決めたことが、その後の戦局にどれほど自信を与えたか計り知れない。

盛況の名古屋、大阪大会

第1戦は15－4。意外に手応えがなかった。

舞台を大阪に移しての第2戦、コートサイドにまで観客があふれた。スタンドから太鼓が打ち鳴らされる。35年にわたる日本ハンドボール界の夢の実現を祈る響きをも聞こえた。

その斗志において、あるいは一歩をゆずるのではないかとさえいわれた韓国に対し完勝した。

「全勝で代表だぞ」ファンの声援を背に選手たちは「まだ一次リーグが終ったばかり」と慎重な態度を崩さない。

第3戦で勝利が確定

日本快進撃は名古屋でもつづいた。国内有数の大体育館が人で埋った。ガンバレ〇〇……。選手を励ますたれ幕がいくつも吊るされた。

奮起したイスラエルの善戦にあって初めて苦戦。

「イスラエルの前半の強さは計算ずみ……」。ハーフタイムにも余裕があった。はたして後半が始まると7分間に6点をもぎとって快勝。試合後のプレス・インタビューはもう優勝ムードだ。

田村会長、荒川理事長も「まだ1試合残っています」といいながらも「ありがとう」を繰り返す。

有終の美、全勝飾る

東京に戻っての第5日、韓国がイスラエルに屈して日本の自動的優勝、あっ気ないほどであった。時に11月26日午后7時16分。宿舎では全国から贈られた千羽鶴が選手たちの静かな凱旋を待っていた。

最終日、駒沢屋内球技場は四千近いファンであふれ、日本は声援に応えて有終の美を飾った。

駒沢は日本ハンドボール界のふるさとだ。数え切れぬほどの先輩たちがここで砂けむりをあげ、冷めたい風を切りながら青春の日々を送った。由緒の地で今、日本は悲願を実らせた。

周到な準備と努力。日本は勝った。君ケ代が場内に響きわたる。

いつの日か、オリンピックの聖火の下で、この曲を聞きたい。

そのために、第一歩を踏みだした全日本チームの選手たちにかさねて心から御苦労さまといいたい。

「ハンドボール」12月号（第93号）目次

【表紙写真】11月28日オリンピック予選最終戦日本—韓国・駒沢体育館（山田真市氏撮影）

オリンピック アジア地域予選会総観戦記

後半47分木野―近森の好パスをうけた中井豪快なシュートを決める(日韓1回戦)

日本、快調なスタート切る

第1戦・日本×イスラエルの1回戦は11月14日東京体育館で開会式に引きつづき午后3時43分から開始。観衆三千九百。
▽レフェリー H・カールソン（スウェーデン）、L・オルソン（スウェーデン）▽公式計時員 岡前義春（日本）▽公式記録員 佐野和夫（日本）

日本 15（8―1 / 7―3）4 イスラエル

【イスラエル】

		得
GK	セラ	0
FP	ビアリック	0
	ホフマン	0
	バングロビッツ	1
	アドモニ	0
	テルオア	1
	ベン・アリ	0
	レフラー	0
	リクリン	2
	ナーマン	0
	テネンバウム	0
7MT	(1)	4

【日本】

		得
GK	本田	0
	大村	0
FP	飯田	3
	藤中	1
	木野	2
	野田	3
	近森	1
	有永	3
	大江	0
	中井	2
	早川	0
	新実	0
		15（4）

▽反則退場【日】木野、中井、藤中【イ】ホフマンいずれも2分

観戦記

藤本 強（本誌編集長）

開始後40秒、スローオフのボールをゆっくりと廻していたイスラエルのボールを5―1防禦のトップにいた藤中がカット、ドリブルで進み、右サイドから中央に走りこんできた野田にパス、野田が中央やや右よりからジャンプシュートを決めた。このカット・速攻、藤中、野田による1点がその後のこの大会の命運を決めたといってよい程の見事な速攻であった。

ついで3分、藤中がまたもやイスラエルのボールをカット、そのまま自ら持ちこみ、決めた。

この2点により、日本チームはグッと楽になった。

逆にイスラエルは縮みあがり、シュート深いところでボールを廻し、シュートらしいシュートを打てないまま時がたった。この間、本田も良くゴールキーパーをつとめ、防禦のピストンと相まって、ディフェンスは全く危気がなかった。

しかしながら、日本の攻撃は今一歩冴えがなかった。これはイスラエルのゴールキーパー・セラの好守もあったが、二人をやや前に出したイスラエルの一線防禦を攻めあぐみ、セットでは、なかなかスカッとした点を取れなかった。

見ている側としては、13分にフリースローらテルオアにワン・フェイントでぬかれた1点に押え

まず大量点はとられる訳はないので、安心して見ていられたが、セットになるとこれという絶対の決め手のないこと、ノーマークをミスすることなどから、今一つものた足りなさを感じさせる前半であった。この間にも、着々と得点を重ね、前半は8―1と大差をつけ、大勢は決まった。

後半開始直後、近森が7MTを決め、快調にすべり出したが、その後は10分間得点なし、次の得点が、41分の木野の7MTというのであるから、いささかじれったい。

後半に入って、7MTでない得点が入ったのは42分になって、中井による得点。

イスラエルは48分にバングロビッツが7MTを決め、51分、54分にリクリンが日本が得点をとってすぐのスローオフのボールをロングのジャンプシュートで2点をたたきだしたのがせいぜいで、日本のディフェンスを破るまでにはいたらなかった。

村田監督の念願であった〝良い守備〟はどうやらできあがったが他に課題が生れたのがこの日の全日本チームである。

一時間中緊張を続けているのはたいへんなことであろう。しかし、全日本チームはアジア予選を勝ちぬくことが目的ではない筈、オリンピック入賞へ、あわよくばメダルをと考えている筈、このような意味において、リクリンの得点はいかにも残念である。

また攻撃においては、完全なノーマークをミスするケースが4～5回もみられた。7MTのミスも2本ある。

とにかく檜舞台での試合はこんな大差がつくことは考えられない1点、2点がいかに重要な意味をもっているかは判りすぎるほど判っている筈。1点に泣いた1年前のことを考え、1点、1点、1点を大事にしていって欲しい。後半の7MT以外の得点が僅か4点というのはいかにも寂しすぎる。

日本―イスラエル①
ランニングスコア

	日本	イスラエル
前半		
50秒	①野田	
3分10秒	②藤中	
7分5秒	③有永	
11分1秒	④近藤	
13分10秒		①
18分10秒	⑤飯田	
26分	⑥野田(7)	
28分30秒	⑦飯田	
29分30秒	⑧有永	
後半		
25秒	⑨近森(7)	
10分30秒	⑩木野(7)	
12分	⑪中井	
17分	⑫中井	
18分		②(7)
20分30秒	⑬木野(7)	
21分		③
22分5秒	⑭野田	
24分	⑮有永	
24分10秒		④

(7)は7MTを示す

韓国、鮮やかな逆転勝ち

第2戦・イスラエル×韓国の1回戦は11月17日午後6時6分から東京体育館で行われた。観衆一千 ▽レフェリー H・カールソン L・オルソン ▽公式計時員 岡前義春 ▽公式記録員 佐野和夫

韓国 15（6−4、9−9）13 イスラエル

【イスラエル】	得		得	【韓国】
セラ	0	GK	0	金(昌)
ビアリック	3	FP	2	黄
ホフマン	0	FP	0	全
バングロビッツ	2	FP	0	金(栄)
アドモニ	3	FP	1	宋
ヤリミ	1	FP	0	李(鍾)
テルオア	1	FP	0	柳
エラザリ	0	FP	3	金(成)
リクリン	0	FP	0	朴
ナーマン	3	FP	2	金(弘)
テネンバウム	0	FP	7	車
(8)	13	7MT	15	(3)

▽反則退場【韓】全、金(成)いずれも2分

観戦記

武藤一彦（報知新聞運動部）

〝ストップ・ザ・ニッポン〟をめざす両チーム。すでに第一戦、日本に完敗したイスラエルはともかく、韓国は今大会に初登場だ。村田監督以下選手、関係者の鋭い目が光る。

先取点はイスラエル。ビアリックが7MTをあっさり決めた。続いて3分。テルオアが韓国DF陣の真正面から戦いを挑む。194cmの長身、サウスポー、ボールをわしづかみにするとグッと切れ込みワンドリブル。その瞬間、からだを一回転、ノーマークになったところをあざやかに決めた。会場からホーッ、という嘆息、みせるプレーだった。

韓国も持ち味をフルに発揮した。4分、ゴール右の柳がポストに待つ車に好パス、車がすかさず倒れ込んだ。

DF突破で〝内部〟からの攻略をめざす両チーム。イスラエルはより高い効率を求めて外側からのシュートを打たなかった。韓国は正面をさけ左右の倒れ込みに執着した。中盤を迎えてイスラエルが3−1とリード、動きのわりには少くない得点となったのはそのせいだ。

だが、このあとイスラエルの動きにスキがでた。疲れか、一瞭の気のひるみか。突然動きがとまる。

韓国は16分、黄が右寄りから左ポストにあたるきわどいシュートで1点差に迫ると18分、20分とたて続けに7MTを車が決めてあっさり逆転。21分には金(弘)−黄とわたる初の速攻も出て5−3とした。

2点差で迎えた後半はシーソーゲーム。金(弘)、車、金(成)の活躍で韓国が逃げれば、イスラエルはヤリミ、ヴァングロビッツ、ナアマンが頑張る。しかし、韓国の攻撃には幅があった。19分すぎ車が中央からバウンドを決めたのに続き、速攻で金(成)、さらに22分には車が左スミからフワリと浮かしたフェント・シュートで13−9と大勢を決めた。

韓国はよく動いた。ローリングのあと左右からとび込む、いわゆるボクシングでいう〝テレフォン・パンチ〟。攻撃は単調だが、ボールに一丸となって殺とうするひたむきさで一歩勝っていた。イスラエルはシュート・チャンスをむざむざと見捨てる〝もったいない〟攻撃が惜しまれる。

なお、この試合は日本ハンドボール史上初の国内における外国同士の対戦だった。

写真は韓国イスラエル1回戦金(成)のシュート決るGKセラ

おれとお詫び

ミュンヘン・オリンピックアジア地域予選開催にあたって、全国関係者の協力を賜り厚く御礼申しあげます。

日本チームの勝利、大会の成功は皆々様の御支援によるものと重ねて感謝の意を表すとともに、入場券前売りなどで若干の手ちがいがありましたことをお詫びいたします

12月1日

日本協会アジア予選
実行委員会

日本、絶妙のパス攻法

目立つ車聖福の攻撃力

第3戦、日本×韓国の1回戦は11月20日午後6時2分から大阪市立中央体育館に満員・三千七百人の観衆を集めて行われた。▽レフェリー、H・カールソン、L・オルソン▽公式記録員　東嘉伸（日本）▽公式計時員、山本孝男（日本）

日本 20（10－4、10－5）9 韓国

得	【日本】		【韓国】	得
0	本田	GK	金(永)	0
0	大村	GK	金(昌)	0
0	飯田	FP	黄	0
4	中井	FP	車	8
3	野田	FP	全	0
3	有永	FP	金(栄)	0
2	近森	FP	宋	1
4	木野	FP	柳	0
1	大江	FP	金(成)	0
3	早川	FP	金(弘)	0
0	東	FP	秋	0
0	氷海	FP	李	0
20	(1)	7MT	(4)	9

▽反則退場【日】飯田＝2分間

観戦記

杉山　茂（NHK運動部）

立ちあがりともに気負いがみられた。初得点は3分の日本。近森が相手のパスミスを素早く捨って独走であげたつづいて4分木野ー近森。

韓国は詰めのいい日本のディフェンスを攻めあぐみチャンスがつかめない。18分やっと車がミドルをとばしたが、9分、12分日本の巧妙な攻撃で4－1となった。

戦局の岐れ路は微妙なワンプレーにある。

15分の韓国のプレーがそれだった。

シュート・リバウンドを拾っての逆襲で金(成)がノーマーク、絶好のチャンスだったがGK本田が鮮やかにクリアランス、ピンチを救った。

金(成)の若さを読んだ本田の動き勝ちともいえたが、ここで1点あったら、韓国は反撃の態勢を整えられただろう。まして50秒後車のミドルが実ったのだから。

16分をすぎて日本は完全にペースへのった。17分、19分それぞれ野田、木野の好アシストを得て連続ゴール、さらに場内を沸かせたのは19分20秒の野田だ。サイドの彼にボールが渡るともう大歓声、期待に応えて十八番のダイビングシュートを決めたのだから四千のファンは大喜びだった。

後半になって韓国もクロスパス多用の攻め口を改め遠い球廻しから車、宋らでミドルを狙ってでたが、日本の守りは崩れない。

ほとんどつけいるスキを与えず封じこみ、攻めては有永の強肩、近森、中井の活躍で7分12－6とダブルスコア。

このあと木野が10分13m地点からのロング、11分ジャンプからのバウンズ、13分サイドから倒れこみと″独演会″。勝利を確定づけた。

韓国も車が切れ味の良いシュートを放って7MT3点を含む8ゴールをあげたほか全員最後までスピードが劣えず、中盤の走りではむしろ日本をしのぐ場面さえみせた。しかし、国際経験で日本に一歩も二歩もゆずった。日本は絶妙なパスワークによる攻撃とシャープなフットワークによつて支えられた守りの固さが勝因で第1次リーグを順調にのり切った。

ホルルIHF技術委員長は「これほどスピーディな試合を見たのは初めて」と激賞したが、得点差の割に、たしかに見応えのある面白いゲームであった。

【第1次リーグ順位】①日本勝ち点4（得35、失13）②韓国勝ち点2（24、33）③イスラエル勝ち点0（17、30）

日本－韓国①
ランニングスコア

	日本	韓国
3分	①近森	
4分	②近森	
8分		①車
8分40秒	③有永	
12分	④中井	
16分		②車
16分45秒	⑤中井	
18分30秒	⑥中井	
19分10秒	⑦野田	
20分		③宋
20分12秒	⑧有永	
21分	⑨野田	
22分		④車(7)
25分		⑤車(7)
28分	⑩木野	
2分	⑪有永	
3分		⑥車
7分26秒	⑫中井	
10分	⑬木野	
11分5秒	⑭木野	
13分	⑮木野	
15分10秒	⑯野田	
16分		⑦車
17分		⑧車(7)
18分10秒	⑰大江	
19分20秒	⑱早川	
21分	⑲早川(7)	
23分		⑨車(7)
29分	⑳早川	

(7)は7MTを示す

木野　快記録更新　木野実選手の公式国際試合連続得点はこの予選会を終ってついに33試合と伸びた。通算136ゴール。41年9月中国戦でデビュー以来というのだから素晴しい記録だが、当人は「新聞などが騒ぐだけ……」とまったく気にしていない。

ベスト7　最終戦の記者席はすでに日本の優勝も決まりもっぱら各国の主力選手の″勤務評定″に話の花が咲いていたが本誌がそっと聞いた机上のベスト・セブンは上記のような顔ぶれであった。

K　本田（日）
F　車（韓）
レフラー（イ）
木野（日）
近森（日）
野田（日）
藤中（日）

日本、後半一気の速攻

第4戦・イスラエル×日本の2回戦は11月23日午後3時10分から名古屋・愛知県体育館で行われた。観衆四千五百。▽レフェリー H・カールソン、L・オルソン▽公式計時員 稲石三二（日本）▽公式記録員 林 正信（日本）

日本 18（6―5、12―2）7 イスラエル

得	【日本】		【イスラエル】	得
0	本田	GK	セラ	0
0	下里	GK	ホルトマン	0
2	有永	FP	ヤリミ	1
3	木野	FP	レフラー	3
2	野田	FP	テネンバウム	2
6	飯田	FP	ビアリック	0
2	藤中	FP	ホフマン	0
1	近森	FP	ペン・アリ	0
0	新実	FP	テルオア	1
2	中井	FP	エラザリ	0
0	斉藤	FP	アドモニ	0
		FP	リクリン	0
18	（2）	7MT	（1）	7

▽反則退場【日】斉藤、【イ】ヤリミ リクリン いずれも2分

観戦記

改田 智洋（朝日新聞名古屋運動課）

「いいディフェンスが出ればいい速攻が一人でに出るものだ」と村田監督がいったが、このいいディフェンスが組めるようになったのは後半からだった。イスラエルに手の内を読まれ、前半の日本は第一戦で大勝したとは思えないほど苦戦をしいられていた。

日本の立上りは0―6のディフェンス。イスラエルは1―5。それも中央の三人の動きがよく日本は容易に攻込むことが出来ない。それでも7分ようやく木野―野田と渡り、野田が右サイドから得意の倒込みシュートで先制点をあげた。さらに8分30秒、木野が中央の近森に、近森がバックハンドパスで中井にと右から左へ速いパスを回して追加点をあげた。これで日本はペースをつかむかにみえた。

ところがイスラエルは第一戦パスをカットされ速攻に結びつけられて大敗しているため、中にはいらず外で大きくパスを回す。第一戦の敗北で当然考えられる作戦。これが図に当った。そして日本が対戦前もっとも警戒していた長身を生したロングシュートを打ってきた。9分に右45度からレフラーが、11分10秒には同じ位置からテルオアがともにロングシュートを決めまたたく間に追いついた。さらに12分、今度は左45度からテネンバウムがカットインシュートで逆転に成功した。日本としては予期しなかった苦戦だ。

だが、4―4のあとの23分、イスラエルのレフラーが7MTを失敗したのに対し、30秒後に日本は野田が7MTを決め5―4とリードした。この7MTの明暗は前半終了前から後半にかけての試合の流れを変えた。

日本は前半の中盤過ぎから藤中か中井を大きく前に出してイスラエルの攻めを早い時点でつぶそうとした。「あのディフェンスが当ったのが勝因」と竹野コーチは試合終了後話した。が、得点では1点リードして終った前半だが、印象としては調子に乗ったイスラエルと浮足立った日本の差が出ていたという感じだった。

しかし後半になると日本の動きが見違えるようによくなった。ディフェンスがしっかりしてきたので攻撃も速くなる。攻守の歯車がうまくかみ合いスムーズに動きだしたといった感じだ。開始直後の木野のロングシュートにはじまり野田―藤中の大同製鋼コンビによるポストプレーなどで着実に、そして面白いように加点、わずか7分間で連続6点をあげて試合の大勢を決めた。

イスラエルはこの大量失点でベンチも選手もいっぺんに戦意を失ってしまったようだ。動きは悪くなり、ミスも続発。さらに若手選手をいれたため、攻守のテンポがますます乱れ差は広がる一方。後半わずか2点しか返すことが出来なかった。

この結果日本は三戦全勝となり、得失点差もプラス33。最終戦の対韓国をまたず九分九厘ミュンヘン五輪への切符を手中に納めた

日本―イスラエル②
ランニングスコア

	日本	イスラエル
7分	①野田	
8分30秒	②中井	
9分		①
11分10秒		②
12分20秒		③
12分50秒	③木野	
16分10秒		④
21分40秒	④飯田	
23分30秒	⑤野田(7)	
24分26秒		⑤
25分20秒	⑥飯田	
1分	⑦木野	
2分6秒	⑧藤中	
4分10秒	⑨藤中	
6分	⑩飯田	
6分25秒	⑪飯田	
7分10秒	⑫中井	
10分		⑥
11分8秒	⑬有永	
14分20秒	⑭飯田	
17分	⑮木野	
19分	⑯飯田	
21分10秒	⑰近森	
23分	⑱有永(7)	
26分		⑦

(7)は7MTを示す

レフラー（13点）、韓国を圧倒

日本の"自動的優勝"決まる

第5戦・韓国×イスラエルの2回戦は11月26日午後6時9分から駒沢屋内球技場で行われた。観衆四百 ▽レフェリー H・カールソン、L・オルソン▽公式計時員 藤田八郎（日本）▽公式記録員 佐野和夫

イスラエル 22（8―6、14―9）15 韓国

得	【イスラエル】		【韓国】	得
0	ホルトマン	GK	金(永)	0
0	セラ	GK	金(昌)	0
13	レフラー	FP	黄	1
0	ナーマン	FP	全	0
3	ビアリック	FP	車	9
0	ヤリミ	FP	宋	0
1	テネンバウム	FP	金(成)	2
0	ペン・アリ	FP	孫	0
0	エラザリ	FP	李(鍾)	1
2	アドモニ	FP	柳	0
2	バングロビッツ	FP	朴	1
1	テルオア	FP	金(弘)	1
22	（5）	7MT	（3）	15

▽反則退場【韓】李、【イ】レフラー、ベンアリいずれも2分、ベンアリ5分。

観戦記

武藤 一彦（報知新聞運動部）

「オイオイ、一体どうなってんだい」スタンドで観戦の日本チームの面々がすっかり喜んだのもムリはない。弱いハズのイスラエルが豪快な攻撃から次々と加点、韓国をほんろうしたのだ。

前半はイスラエル・レフラー対韓国・車の一騎打ち。スローオフ

拍子ぬけの〝劇的瞬間〟

□……待ちに待った瞬間がこうも平凡な、感激のうすいものであったとは――。ある時は興奮状態に追いこまれるほど緊張し切っていた選手たち。もっと歓喜してよいハズだった。それがカメラマンの注文でやっと笑顔がのぞく程度、拍子ぬけの〝劇的瞬間〟であった。

□……大会が近づくにつれ「日本、楽観を許さず」の声が高まり、キャリア豊かな木野主将でさえ、第1日（14日・東京）の前日は「こんなに長い一日があるだろうか」と思ったほど重責に押しつぶされそうな気持ちでいたという。いざ幕をあけてみるとイスラエルに切れ味がなく、韓国も燃えたぎるファイトが感じられない。

□……第1戦を終えて誰もが「いける」と思ったようだ。取りこぼしだけを注意しながら日程が進んだ。第4日（23日名古屋）で新聞は早々と「ミュンヘン行き確定」を打ち出した。

残る望み（?）は最終戦に優勝がかかり、コート上で思い切り勝利をうたいあげることにかかった。そのためには韓国がイスラエルに連勝しなければ……。

□……イスラエルの鋭い動きに点差は開くばかり。「こりゃあ今夜決まるぞ」。後半10分をすぎる頃から記者やカメラマンの〝優勝〟の取材がはじまった。

騒々しくなるまわりに比べて選手たちはいっこうに沸かない。「満員の観衆、日韓戦の興奮が尾を引く中での優勝、カッコよかったハズなのに……」。それがスタンドでの達成、しかも外国同士の対戦日とあってファンの数はまばらときている。

□……「最終戦まで持ちこんで、となればたしかに〝演出満点〟だったでしょうが、そんな冗談がいえる余裕も、これまでの努力があったからこそ……」と荒川理事長はいかにもこの場にふさわしい勝利の弁を述べた。記者会見に臨んだ村田監督、竹野コーチ、木野主将も喜びの談話よりしんみりとした回想ばなしばかり。永い道のりを印象づけた。

来合せていた古いOBたちはこの勝利に漫心することなくむしろこれからが勝負だ、と新たな斗志を期待、35年目の快挙はいたって地味なムードのうちに成しとげられた。

□……この夜のミーティングにお祝いの美酒はなかった。いつものようにヴィデオテープが〝次の相手〟を映し出し熱心な議論が夜遅くまでつづけられた。すべて宿願を成就させた直後とは思えぬ静かな風景であった。

直後、車がDFの正面をかけ抜けざま45度から決めてまず先取点。が、イスラエルも〝身上〟のスロースターターにようやく火のついた7分、レフラーが左45度、高い位置からのバウンド・シュートで追いつく。こうしてはじまった〝対決〟はなんと車が連続5（内7MT2）レフラーも5運続（7MT2）を含め6得点とすさまじい爆発力を互いにみせて好勝負。結局前半は8－6でイスラエル、わずかに優位のまま終った。

後半も一進一退の展開が続いた。イスラエル・ビアリックの外側からの強引なシュートとレフラーの7MTで4点差にすると韓国も車が7MTと正面突破で一歩もひかない。しかしこうした試合展開の中にもイスラエルの動きが伸び伸びとしていた反面、韓国はDFの精彩がなく、イージー・シュートを楽々と打たせて青息吐息……。

韓国の破綻は、10－12で迎えた14分にやってきた。冷静さを欠きしばしば退場、7MTのくり返しをしていたが、ここでレフラーに7MTを許し、その直後、DFの穴を再びレフラーにつかれ、豪快なロング・シュートを決められ。

その後はイスラエルの一人舞台。スナップのきいたレフラーのシュートはあいかわらずさえ、加えてビアリックの矢のようなシュートも決りはじめ、手のつけられない得点ラッシュとなっていった。

対日本二回戦、前半でくいさがって意気あがるイスラエルに対して韓国は、ローリングそしてサイドからとび込むという単調さのくり返し。攻撃のパターンを読みつくされては得意の速攻が不発に終ったのも仕方ないだろう。

22－15でイスラエルの勝ち。この瞬間、日本のミュンヘン行きが決定した。スタンドで静かに喜びをわかち合う日本チームが印象的だった。

派遣の決定はJOCで

アジア予選を勝ち抜いたことで早くも関係者、ファンの関心は来夏のミュンヘンにとんでいるが日本チームの派遣決定は日本オリンピック委員会（JOC）が行うことになっている。

JOCが、苦節35年、ようやくにしてつかんだ全ハンドボールマンの〝栄光〟を評価してくれることを期待すると同時に、日本ハンドボール界が今回の勝利に慢心せず、より自重して今後の発展を期すことを誓いあいたい。

☆　☆　☆　☆

日本、有終の美を飾る

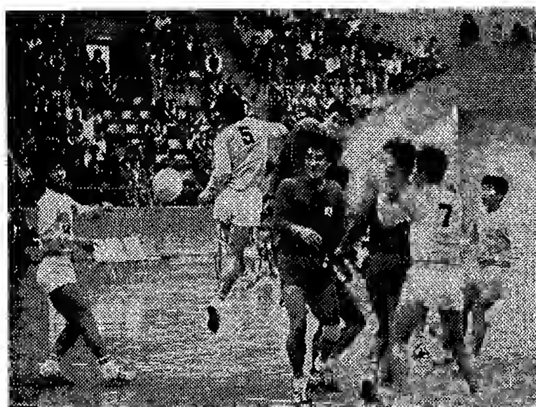
全試合一桁の失点に防ぐ

第6戦（最終戦）日本×韓国2回戦は11月28日午後3時42分から満員・約四千の観衆を集めた駒沢屋内球技場で行われた。▽レフェリー H・カールソン、L・オルソン▽公式計時員 岡前義春▽公式記録員 佐野和夫

日本 21（8—4 / 13—3）7 韓国

得	【韓国】	
0	金（永）	GK
0	李（錦）	GK
3	黄	FP
0	全	FP
1	車	FP
0	宋	FP
1	柳	FP
0	孫	FP
0	秋	FP
0	金（成）	FP
1	金（弘）	FP
1	李（鍾）	FP
7	MT（1）	

得	【日本】	
0	本田	GK
0	大村	GK
3	近森	FP
6	木野	FP
3	有永	FP
1	中井	FP
4	野田	FP
1	飯田	FP
2	氷海	FP
0	大江	FP
1	藤中	FP
0	東	FP
21	MT（7）7	



日韓2回戦—飯田のシュート

観戦記

小山 敏昭（共同通信社運動部）

日本の快勝—。すでに優勝を決め4戦全勝でミュンヘンへ花を飾ろうという日本。そんな意欲が前半の攻撃にわざわいしてなかなかリズムに乗れなかった。しかし攻撃面でのさえのなさは守備力にものをいわせ、韓国に大量得点を与えなかったのが良かったのだろう。裏を返せばディフェンス力の差が勝敗を分けたといえる。

立ち上がり5分すぎまでは両チームともシュートチャンスがつかめなかった。日本は早く得点しようとあせり韓国は攻撃のフォーメーションを日本守備陣に読まれ無理な形のシュートを繰り返していた。それでも先制点を奪ったのは韓国だった。過去3戦で24得点と韓国の6割以上の得点を記録している高校生、車聖福をマークするあまり、黄致範に左ポスト下にバウンドシュートを決められた。しかし日本もシュートしようとした有永に反則した韓国のミスから野田が簡単に同点7MTを決めた。その後日本は先手を取ろうと野田が再度にわたってコーナーからの倒れ込みシュートを見せたが、シュートは韓国GKの正面をついて得点にならなかった。それでも韓国選手の不用意な反則で7MTを取り、前半を何とか8—4とリードした。

後半に入ると木野、有永らに調子が出て、徐々にペースを取り戻してきた。5分韓国の7MTをGK本田の好守からボールをはじき返すと木野が逆に速攻を決めて加点。その後もほぼ1分間隔で得点を重さね、16分すぎからは連続7得点して勝利を不動のものとした。

速攻を得意とする同じ型の両国だが、正確さと組織力ははるかに日本の方が上。一年以上にわたる合宿で、本来なら各チームのエースであるためのコンビネーションの心配も全く見られなかった。これが若さの特権というのだろうか。また有永、近森らがみせたポストプレーはスウェーデンから学んだものと思われる。上背のないチームを相手としたときに効果のあるプレーということはいやというほどスウェーデンのオルソンらが見せた。そういう意味でもスウェーデンの来日は無駄ではなかったわけだ。試合後の表彰式で田村会長、荒川理事長の大粒の涙がいままでの苦労の全てを物語っているようだった。

村田監督の話　日本で予選を開いた甲斐がありました。この一年間強化目標を防禦においたのが成功したと思います。本番までになお一層これまでの経験を生かしてきたえぬいていきたいと思います。選手が恵まれない環境を克服して、本当に良くやってくれました。

日本—韓国② ランニングスコア

	日本	韓国
5分		①
5分10秒	①野田(7)	
8分		②
8分50秒	②中井	
9分30秒	③近森	
14分22秒	④野田(7)	
15分5秒		③
18分	⑤野田(7)	
19分25秒		④(7)
20分18秒	⑥木野	
21分	⑦近森(7)	
24分20秒	⑧野田	
40秒	⑨有永	
5分52秒	⑩木野	
8分30秒	⑪近森	
9分10秒	⑫藤中	
10分50秒		⑤
12分		⑥
13分	⑬木野	
15分10秒	⑭飯田(7)	
16分		⑦
16分40秒	⑮有永(7)	
17分35秒	⑯木野	
19分30秒	⑰有永	
22分	⑱氷海	
24分20秒	⑲木野	
27分30秒	⑳木野	
29分	㉑氷海	

【日本】

	氏名	所属	得点
K	本田	大阪イーグルス	・
	大村	全日体大	・
	下里	大崎電気	・
F	木野	ワクナガ薬品	⑮
	近森	大崎電気	⑦
	野田	大同製鋼	⑫
	有永	東京海上火災	⑪
	飯田	大崎電気	⑩
	藤中	大同製鋼	④
	中井	大同製鋼	⑨
	大江	芝浦工大	①
	氷海	日体大	②
	新実	芝浦工大	・
	早川	ワクナガ薬品	③
	東	大崎電気	・
	斉藤	群馬教員	・

【イスラエル】

	氏名	所属	得点
K	セラ	会社員	・
	ホルトマン	体育教師	・
	スティガー	機械工	・
F	ヤリミ	自動車工	②
	テネンハウム	体育教師	③
	レフラー	学生	⑯
	ビア・リック	体育教師	⑥
	ベンアリ	航空機械	・
	ホフマン	学生	・
	リックリン	学生	②
	テルオア	団体役員	④
	ヴァングロビッツ	建築業	⑤
	ナアマン	学生	③
	エラザリ	団体役員	・
	アドモニ	学生	⑤

【韓国】

	氏名	所属	得点
K	金永年	成均館大	・
	金昌鉱	教員	・
	李錦求	朝大付高	・
F	黄致範	慶熙大	⑥
	金栄会	慶熙大	・
	全裕守	軍人	・
	宋錫仁	軍人	②
	金成憲	東亜高	⑤
	車聖福	東亜高	㉕
	金弘植	円光大	③
	李鍾范	円光大	②
	柳在忠	教員	①
	朴鍾甲	教員	①
	秋章云	朝鮮大	・
	孫泰烈	成均館大	・

○内数字は通算得点

全国一丸の協力に感謝

日本ハンドボール協会理事長　荒川清美

嬉しい。まったく文句のない日本の勝利であった。

昭和41年9月にミュンヘン強化選手28名を発表して以来5年2ケ月、この間3回の欧州遠征（2回の世界選手権出場を含む）。お金もないのに背伸びしすぎる、頂点強化だけが総てなのか―内外からの厳しい声に、私自身も何度自問自答したであろうか。

そしてそのたびに私は8年前東京オリンピック直前、種目削減の悲劇にあった"あの日"のことを思い出した。オリンピック種目からはずされたばかりに、体協の玄関をくぐるのさえ苦痛であった。

オリンピック至上主義、人は笑うかも知れない。しかし後に続く若者たちになんとかオリンピックへの道を切り開いてやりたい。それがハンドボールに親しむすべての人に誇りを与えることになるのだ。底辺の拡充にたずさわる人もいつかは判ってくれると思った。

多くの難関と悪条件をくぐりぬけて監督、コーチ、選手が、いや全国の関係者がオリンピック予選へ一丸となって突き進んでくれたことに感謝をしたい。ありがとう皆さん。

問題はこれからだ。オリンピック種目として先輩種目と肩を並べるようになって、いっそうハンドボールを見る目は厳しく、けわしいものになっていくであろう。自ら重し我が歩む道を誤ってはなるまい。

参加が実現したあかつきにはミュンヘンでも恥ずかしくない成績をあげたい。そのためには改めてスタート地点にたって慎重な対策をこうじたい。

与えられたチャンスをいかに活かすべきか、来年8月のオリンピック開会までの9ケ月こそ日本ハンドボール界の浮沈をかけた期間ということができよう。

重ねてすべてを犠牲にして全ハンドボールマンのために斗い栄光を手にされたナショナルチームに敬意を表するとともに、つねに我々の活動に暖かい理解を示して下さった報道関係者諸賢、全国の関係各位、ファンの皆さんに心からお礼の言葉を述べたい。

技と心の結集……日本

5年間の労苦、鮮やかに実る

▽……優勝インタビュー（11月26日・駒沢屋内球技場）で竹野コーチは『どの選手も自分のチームに戻ればエース。俺が々々という気が先に立ってチーム編成当時はまとめあげるのに苦労した』と回想した。

この言葉は日本チームの"歴史"を物語るエピソードであろう。

昭和18年の日独枢軸国大会（東京）で結成されたチームを第1号に単発的な国際試合のための全日本を含めば、これまでナショナルチームは十数回編成されている。

世界選手権（男子）にも4回代表を送りこんでいるが、一つのチームとしての固まりという点では決して満足とはいえなかった。いつもにわかごしらえ、急造チームだったのだ。

▽……ところが今回は違った。昭和41年9月、中国戦のために発表された28人にミュンヘンへの第一歩として「オリンピック強化選手」の名が冠せられていた。この中から木野、近森、飯田の3人が生き残り(?)、今回のチームの柱になった。氷海、新実、大江などは当時まだ高校2年生である。

村田監督―竹野コーチライン日本協会にしては珍しく長期政権をとったのもいい。

俗にいう大舅、小舅の多い斯界であってみればこのラインが平穏無事に今日まで来たとはいえないだろう。ナショナルチーム不信論さえ頭をもちあげた時もある。

それを知って悩むコーチや選手たちに心ある者は「それだけ期待が大きいのサ」といって慰めた。

▽……この5年間3回の欧州遠征をしている。それがチームワーク強化に大きな役割を果たした。木野に「2年前、ユーゴの国際大会で強敵のユーゴを1点差で破った時、みんな泣いた。いいチームに入れてよかったと思った」という話を聞いたことがある。

この時すでに今日の勝利は予測できた。

すべては実力の世界、今回の予選も決して楽観は許されなかったものの国内有数のプレイヤーが技でも心でも一つに溶けあう。――弱かろうハズがないのだ。

▽……すべてはオリンピックという大命題が支えていた、という声もある。日本協会が一切をオリンピック対策部にゆだねたのもその一例だが、このことを痛切に感じているのは選手だろう。

一般社会へ出たばかりの有永や藤中が「ハンドボールに打ちこまなければならない、と思いながら会社のことがチラッと頭をかすめる時がある」と苦しい胸中を話してくれた時、答えに窮したことを覚えている。

強化合宿、遠征なども決して恵まれた条件ではなかった。選手たちにしてみれば文句をいいたい時もあったにちがいない。

▽……一方、予選が近づくにつれ、選手にのしかかる重圧は日増しに強くなった。「35年目の悲願」「斯界の浮沈をかけて」「全国の期待を背に」……。ある選手は「そのような文字を見たり読んだりするのがこわい」とさえいった。誰が弱気と攻めることができよう。

▽……「選手がよくやってくれました」。村田監督と竹野コーチはいつもまっ先にそう云った。

しかし村田・竹野両氏もこの5年間家庭生活をなかば犠牲にしての"努力"をつづけた。

若い世代とのギャップに頭を痛めた日もあったのではなかろうか。今回の栄光を記者はあえて「村田監督、竹野コーチと16人の選手でかち得た勝利」といおう。

（S）

雄図坐折の韓・イ両国

イスラエル

来日前、ルーマニアで強化合宿（ルーマニアナショナルBなどと3戦1勝1分1敗）、大会5日前に東京入り。大変な意気ごみだった。初練習の評判も悪くなかった。村田・日本監督は「自分が想像していた成長度よりさらに二、三分伸びている」とタズナを引きしめた。

強豪目白押しのヨーロッパ地域をさけて、遠い日本まで乗りこんだ彼らも〝勝利〟を信じて疑わなかったろう。アクシデントは大会2日前（12日）の練習中におこった。

エースのA・レフラーに持病のヒザ痛が出てしまったのである。

今春の世界学生選手権（チェコ）でも目立った存在というレフラーがベストコンディションでなかったことは、イスラエルの戦力を著しく減退させた。

個人技にしても組織プレーにしても特に目立った動きのないイスラエルにしてみれば186cm、左腕という〝武器〟をもつレフラーへの依存度は大きいものがあった。昨春の対日本戦で6点（2試合）を叩き出した実績もある。レフラーの故障がイスラエルの歯車を狂してしまったともいえそうだ。

第2次リーグに入ってからのイスラエルはわずかに活気をとりもどし、日本戦（23日・名古屋）の前半でみせた攻守、韓国戦（26日駒沢）に示した豪快な攻撃はヨーロッパでもまれているだけのことはあった。

「日本も韓国も速いプレーが持ち味であることは知っていた。しかし実際に試合してみるととまどうプレーばかりで、対処する策がたたぬ間に大会が終った」とはセンドラコーチの弁だが、「オリンピックに是が非でも出場」という張りつめたムードはあまり感じられなかった。「アジア地域とはいえ日韓両国と我々は〝人種〟が違う」（センドラコーチ）せいだろうか。

韓国

勝負への執念と粘着力は3ケ国随一という前評判であったが、大会直前まで国内事情がからんでメンバーが固まらなかったと伝えられ、それが響いたのか予想に反する精彩のなさで終った。

ベテラン、新人半々という編成、しかもナショナルチームの編成はこれが初めてとあれば〝時間不足〟は致命的。

メンバーの申しこみが遅れ（本誌既報）、日本チームはこれまでの交流資料をもとに来日予想リストをつくりあげたが、ほとんど的中していた。意外だったのは高校生3人（車聖福、金成憲、李錦求）が含まれていたこと。車、金の東亜高コンビの非凡な実力は今夏来日した時すでに、日本関係者の舌を巻かせたものだが、まさかナショナルチームに登用されて来るとは考えていなかった。

「いかに優秀とはいえ高校生の彼らが加っているようでは……」と韓国の実力を推測した人もいるが車のしなやかな腰と腕を利した攻撃力は誰もが見直したようである。

宋錫仁、黄致範、金弘植といった有力アタッカーをおしのけて彼がエースであったのにはたしかに驚ろかされた。通算25点。宋以下にかっての鋭さがあれば韓国の攻撃陣はやはり相当なものだったろう。

韓国にとって一つの不運はヨーロッパ流の判定に慣れなかったことがあげられ、特に小刻みなフットワークをオーバーステップにとられたのは痛い。

若手の有力選手を並べた今回の布陣は、明きらかに〝次の機会〟を狙ったもの。彼らが今回の敗戦を打倒日本の執念におきかえた時……。日本優位がいつまでも続くとは思えない。

ホルル委員長が認定宣言

アジア予選優勝国認定式は第6日（11月28日・駒沢屋内球技場）日本×韓国2回戦終了後行われた自衛隊東部方面音楽隊の演奏するマーチにのって日本チーム全員が下里選手の掲げる国旗につづいて入場しコート中央に整列、エミール・ホルル国際ハンドボール連盟（IHF）技術委員長が「日本にミュンヘンオリンピックアジア地域代表権を与える」と認定宣言割れるような拍手のなかで村田監督、竹野コーチ、木野主将の首に記念のレイをかけた。日本国歌が吹奏されたあと、選手がコートを一周、ファンの手拍子と五色のテープが乱れとぶなど感激的なシーンがつづいた。

汗と涙のボールを投げいれ

選手たちは認定式（別掲）終了後、再びコート中央に現われて手に手に持っていたボールを高々とスタンドに投げこんだ。

これらのボールは、これまで日本チームの試合や合宿練習などに使われていた選手たちの汗と涙がしみこんだもの。

自分たちの努力を支えてくれたのは全国の声援があったからとお礼をこめての投げ入れになった、という。

合織糸・合織混紡糸



田村紡績株式会社

社長 田　村　正　衛

四日市市東茂福町10—17
TEL 四日市 6—2156（代表）
郵便番号　512

モントリオール五輪も確定的

E・ホルル技術委員長に聞く



E・ホルル氏

国際ハンドボール界の大御所、エミール・ホルル氏（63才、IHF技術委員長、スイス）がアジア予選のため初めて日本を訪れた。

世界ハンドボール界の近況、今後の方針などを聞いてみた。（編集部）

―オリンピックでハンドボールが36年ぶりに実施されることについてどう考えるか。

ホルル氏　世界のハンドボール関係者すべての喜びだ。しかし、ハンドボール採用があまりにも遅すぎた。ハンドボールは誇りある〝世界のスポーツ〟なのだ。

―今後開かれるオリンピックにもハンドボールは〝定着〟できるか。

ホルル氏　一九七六年（昭51）のモントリオール大会での実施は確定している。一九八〇年以降ももちろん続けられるであろう。（注・かたわらに居たM・リンケンバーガーIHF財務理事が『すでにIHFあてモントリオールの組織委員会から実施の正式書類も届いている』と補足説明してくれた）

―女子の採用はどうか

ホルル氏　卒直のところ有望ではない。それよりもモントリオールから球技は男子12ケ国に縮少して欲しいと国際オリンピック委員会（IOC）に要望されていることのほうが問題だ。

―縮少はさけられぬか。

ホルル氏　IOCに対して反対の意見を提出している。もし女子が採用されたとなると男12、女6ということもあり得るが、そうでなければ16の線を通したい。

―モントリオールも大陸別の予選を行うか。

ホルル氏　まだそこまでは考えていない。

―日本のハンドボールに対する印象は。

ホルル氏　スピード、テクニックとも申し分ない。特にボールを持って走る速度と〝全員速攻〟はヨーロッパでも例をみない。

ディフェンスもすばらしい。日本のシフトは0―6（一線）、1―5というよりも「1・2・3」を有効化した初めてのチームとして高く評価したい。

―欠点はどこにあるか。

ホルル氏　ジャンプ力に欠けるため滞空時間が短かい。ボールを溜めておく時間がしたがって少ない。

ロングシューターに目立ったプレイヤーが居ないのも今后の課題だ。

また、相手のGKとのかけ引きが拙い。例えばイスラエルとの2回戦など、長身のセラの「上」ばかりを攻めていた。足元を狙って疲れさせることなどのテを考えたらよかったのだ。

―目立ったプレイヤーは、

ホルル氏　なんといっても野田だ　サイドから飛びこむ攻撃は世界一流である。

―日本はミュンヘンで入賞（6位内）できるだろうか。

ホルル氏　ヨーロッパはいま強豪が目白押しだ。しかも昨春の世界選手権以降各国とも急速に力をあげている。8位のハンガリー、ランク外のノルウェー、ポーランドなどのレベルアップは特に目立っている。日本が去年だけのデータでオリンピックへ乗りこむのは危険であろう。是非ヨーロッパ遠征を行い、連日各国のナショナルチームと手合せをすべきだと思う。

―今回の運営について

ホルル氏　東京も大阪も名古屋もすべて満点だ。荒川実行委員長以下スタッフの努力に敬意を表する。

―日本の体育館は、

ホルル氏　明日からでも世界選手権が開ける（笑）

―日本の観衆について、

ホルル氏　非常に〝公平〟なことが印象に残った。スポーツをよく理解しているからだろう。

―今後、日本に何を望むか、

ホルル氏　是非、東南アジアにハンドボールを普及させる役目を果たして欲しい。

アジア大陸は日本、アメリカ大陸はアメリカがそれぞれ伝統も力も他国をリードしているのだし期待している。

―IHFは大きなルール変更を考えているか、

ホルル氏　特におこるまい。

―タイスコアの時7MTで結着をつける方法は、

ホルル氏　好ましいとは思わぬ。今春4月チェコで開いた世界学生でこのルールが採用されていたがあの大会はIHF主催ではなく、IHFルールを使わなくてもよかった。

―日本のスポーツ記者などはハンドボールは反則が多すぎる、バスケットボールのような〝5反則失格〟といったルールを考えられぬかといっているが、

ホルル氏　とんでもない。バスケットはバスケットだ。反則過多の原因はレフリーの未熟にある。

―試合時間の〝正味制〟は、

ホルル氏　ヨーロッパの記者からもよく云われるが、生理学的にみても60分（男）が精いっぱいだ。これは人類の体格、体力の発達と考えあわせて研究すべきだろう。

―あなたの球歴は、

ホルル氏　一九三六年のベルリンオリンピックにスイス代表として出場している。第2次大戦后は一九六八年までスイスナショナルのコーチングスタッフの一人で、60試合近くヘッドコーチをつとめた

◇

このほか国際的な動向に対するIHFの姿勢を質したが、技術委員会の関知するテーマではないということで答えを得られなかった

この企画にあたり、一宮昌平氏（日体大OB）に通訳を願った。

「地域連盟結成」案を提出

日韓共同でIHFに

アジア各国代表者会議

アジア各国ハンドボール代表者会議は11月15日午前10時から東京目黒の雅叙園観光ホテルで開かれた。

会議は5ケ国に案内状が送られていたが、出席したのは韓国（朴応喆氏、姜仁燮氏）と日本（田村正衛氏＝日本協会々長、荒川清美氏＝同理事長、久田暁氏＝国際部長）の両国だけ。イスラエル（モルデチャイ・ムスキ氏、シエミュエル・ジオベルマン氏）はオブザーバーを条件に途中から顔を出し台湾（宋丙堂氏、翁琳枢氏）は直前になって来日不能となり東京都協会々長渡辺和美氏（日本協会副会長）に委任状が託され、同氏が出席した。また、ホンコンは来日中のヘンリー・スー同国オリンピック委員が前日日本協会関係者にホンコン球界の実情を説明、この日は欠席した。

このほか、アジア予選で来日中の国際ハンドボール連盟（IHF）財務理事マックス・リンケンバーガー氏（西ドイツ）がIHF代表の立ち場からアドバイザーとして同席した。

会議は田村氏が議長をつとめ進められたが、予想どおり冒頭から「アジア連盟結成問題」の論議となった。時期尚早を説く日本と、即時発足を主張する韓国がぶつかり、平行線をたどるかにみえたが、リンケンバーガー氏が『IHFは地域連盟を認めていない。アジア連盟を結成するには内規の改訂とIHF総会における賛同が必要』と発言したため、議論は新たな局面を迎え、IHFに対し内規の改訂を申請するかどうかが焦点となった。

ここでもその必要なしとする日本と、積極的な働きかけを望む韓国が対立、容易に解決の糸口を見出せなかった。しかし正午すぎになって韓国側が「アジア予選欠場も辞さぬ」という態度まで持ち出したため、日本もついに折れ、来春3月ミュンヘンで開かれるIHF理事会までに日韓共同で「地域連盟の組織、結成を認める」という提案を行うことになった。提案文書は韓国協会が作成する。

IHF理事会で日韓案が承認されれば来年8月ニュウルンベルグ（西ドイツ）で開かれる総会で審議が行われる。ここで賛成が得られたあとアジア各国は改めて「アジア連盟結成」について協議することになろう。

なお、リンケンバーガー氏は「総会では三分の二以上の賛成が必要。また地域連盟が認められても参加国はIHF加盟国に限定されよう」と云っている。

会議はこの問題のむし返しに終始し、他の決定事項は一つもなかった。

◇

思ってもみなかった〝結論〟である。日本協会はこの会議に臨む態度としては全国理事会（9月26日）と全国評議員会（10月3日）で「各国間の個々の交流を推進させれば連盟結成を急ぐ必要はない」と決めており、11月8日の月例常務理事会でも再確認したほどだった。

田村会長、荒川理事長とも「連盟結成は一応延伸できたのだし、日韓提案はその場ででた新しい問題」というが中国がらみの国際情勢下、別の難問をかかえこんでしまったのも事実である。

韓国の強腰に引きずられたことなどとあわせて執行部が苦しい立ち場に追いこまれることになりはしないだろうか。

なお、イスラエルはアジア連盟にはまったく無関心のようで、久田国際部長は『仮に結成されたとしても加盟しないのではないか』とみている。

中国と北朝鮮をIHFに

ルーマニアらが申請

アジア予選のため来日したIHF技術委員長エミール・ホルル氏（スイス）は14日夜東京で『中国と北朝鮮のIHF加盟申請がルーマニアと東ドイツから提出されている。来年3月のIHF理事会（ミュンヘン）での議題になるだろう』と語った。

〈注〉台湾はIHF仮加盟国。中国と日本はこれまで2回（昭40と昭41）交流している。北朝鮮とはまったく対戦していない。

新しく五輪候補選手を選出

日本協会はアジア予選の勝利による次の目標として「ミュンヘンでの上位入賞」を掲げることになり、今年度のナショナルチームを11月29日付で解体、年内に新しい全日本選手をオリンピック候補選手として選出することになった。

ナショナルチームの新編成はかねてからの計画に基いたもので、人数などについては明きらかにされていないが荒川理事長を委員長とする選考委員会によって全日本総合選手権（12月15～19日東京）にはリストが発表される模様。

日本協会では10月の月例常務理事会で同メンバーを来年の「ナショナルチーム」とすることも申し合はせている。

また、コーチングスタッフについても新しい観点に立って協議される予定で、消息筋はオリンピック対策部の増員（現在は村田部長竹野、藤本、杉山の3委員）が打ち出されるものとみている。

選考委決まる　日本協会は新しいオリンピック候補選手の選考委員会を次のように編成することになり発表した。

▽委員長　荒川清美（日本協会理事長）▽委員　村田弘、勝繁夫、安藤純光、渡辺慶寿（以上常務理事）竹野奉昭（オリンピック対策部委員）

50年国体は三重県　日本体協国体委員会は11月16日、昭和50年の第30回国体の開催地を三重県に内定した。ハンドボールは四日市市の予定。

ポスト・アジア予選①

日本の五輪
入賞は有望

〝ミュンヘンへの道〟が通じたこうなった以上、残る目標は〝上位入賞〟である。

ミュンヘンオリンピックで日本チームがどこまでいけるか、この際冷静に考えてみる必要もあろう。

1961年に第4回7人制世界選手権に参加した日本チームはすべての面でヨーロッパ諸国に学ぶことのみが多かった。

第5回、第6回と回を重ねるにつれ、得点をあげることは得手になり、ヨーロッパ諸国にヒケをとらない攻撃力を備えるにいたった

1969年のルーマニアをはじめとするヨーロッパ遠征で、日本チームは従来の善戦意識を脱っしヨーロッパ一流チームに対し、勝ち策戦をとれるまでに成長した。

速攻を特徴とする日本チームの特長は点はとれるが、守備が難点失点も多いこととされていた。

この特徴が生かされ、一昨年のタシマイダン杯のユーゴーに対する勝利、その自信をもって臨んだ昨年の世界選手権時における、〝銅メダル〟のユーゴーとの引き分け、ここでもっとも問題となったのは、守備力の強化である。

ここ一年の日本チームの課題は守備力の強化にあるとされていた日本チームは従来〝力のハンドボール〟に弱かった。ルーマニア、東ドイツ、ソ連という東欧圏らしいハンドボール、強烈な大砲を備えた〝力のハンドボール〟には弱点であった守備力をつかれ、大量失点を許していた。

西ドイツ、デンマーク、ハンガリーなどの〝麗華な技のハンドボール〟に対しては、対等というよりむしろ優位に展開することがしばしばあった、その中間的なユーゴーに対しても充分対抗できる力を備えた。

課題とされていた守備力もこのアジア予選、決して弱くはない攻撃力をもっている韓国、イスラエルの両国を全試合1ケタの得点に押えた。

これはスウェーデンとの4試合総失点55（うち7MTによる失点11）一試合平均14点弱、7MTによる失点を除けば、一試合平均11点と明らかに守備力は向上している。今回のスウェーデンチームは従来と異なり、日本の〝苦手〟とする力のチームであった。守備面での向上は明らかであろう。

このように見た場合、現在の日本のハンドボールの力は〝技のハンドボール〟に対しては対等というよりむしろ優位、力のハンドボールに対しては、その力が従来ほど圧倒的な力をしめすとは考え難い。

このような日本チームの分析を基礎にして、オリンピックでの順位を占なう訳だが、これにはくじ運とコンディショニングの問題が大きく左右する。

特に速攻を武器として、体の小ささをスピードで補なった守備をする日本チームの消耗度は他国に比べてはるかに激しい。それが、決勝トーナメントに入ってからの勝ち抜き戦の試合ぶりを大きく左右しよう。

さて、前回の選手権のベストエイトはおそらく従来の世界選手権の慣例から次のような組み合せとなることが予測される。

A組　ルーマニア、ハンガリー
B組　東ドイツ、チェコ
C組　ユーゴ、スウェーデン
D組　デンマーク、西ドイツ

この組み合せを見た場合、日本にとって、苦手な力のハンドボールの国が占めているのはB組だけである。またソ連と日本は9、10位として分けられることが予測される。

このように見てきた場合、A組ではハンガリー、C組では、ユーゴ、D組ではデンマークに対して対等もしくは優位ということがいえる。B組に入ったところで、ここのところ新旧交替に失敗したチェコの力は眼に見えて落ちている。

とすれば、ベストエイト入りは第七回世界選手権に比べて、それほど困難なこととは思えない。

もちろん、これからの9ケ月、得意とする速攻にさらに磨きをかけ、防御力をさらに向上させていくことが重要な条件となるのは云うまでもない。

問題は次である。ベストエイトから上の道は、厳しい。各国は予選リーグのお互いの組の順位を見ながら決勝トーナメントをいかに有利にするかのカケヒキを見せよう。ここでは、どの組に入っても第三番目の座を占める日本は、強敵との争いを二日目に終了してしまい最終戦に強豪同士の争いを見てからのカケヒキはできない。この試合日程の差は日本にとっては不利な材料となろう。日本はあくまでも一敗もしないということで戦いを進めなければならないからだ。ここで準々決勝に対戦するチームに、前項であげたような技の

チームが相手になれば（この可能性はかなりあろう）、準々決勝をきりぬけ、ベストフォア入りする可能性はきわめて強い。前回の選手権でも、予選リーグでもう一点とってさえいれば、準々決勝での対戦はハンガリー、これは69年の対戦経験から云えば、十分に頂けた相手。準決勝を勝ち、決勝進出はちょっと、当時の力ではムリであったかもしれないが、三位決定戦の相手は、得手のデンマーク。ユーゴにとってかわり、三位の座を占め得た可能性も十分にある訳だ。

よしんば、ベストフォアに残念ながら、残れるかったとしても、5〜8位決定戦一回戦で当ることになるであろう国は、現在の世界力関係から云って、技のチームになる可能性が80パーセントはあろう。この5〜8位決定戦で勝つ可能性は非常に高い。

とすれば、現在の日本の力をそのままここ9ヶ月の間に更に磨きミュンヘンにのりこめば、ベストエイト入りはおろか、6位入賞の可能性、くじ運にめぐまれさへすれば、三位入賞の可能性もかなりでてくるということがいえよう。

要は今後の「速攻の強化」、「防衛力の洗練」、「相手の倍以上動いても、一時間中もつ体力」以上三点の強化にいかに努力するかにかかってこよう。

―ポスト・アジア予選②―

今後の頂点　強化対策

前項で、オリンピックの順位として可能性が強いのは3〜6位としたが、これは今後の強化策にかかってこよう。

たとへ、現在、入賞の可能性はあったとしても、ノンベンダラリとしていたのでは、熱気溢れる強化策をとっているヨーロッパ諸国にたちまちにおいてきぼりを食ってしまう。

日本のハンドボールの特長は、アジア予選来日のIHF技術委員長エミール・ホール氏が語ったように "Hadball des Japan ist schnell Handball. Es ist sehr gut" 日本のハンドボールは速いハンドボールである、それはたいへんいいことだを徹底的に伸ばすべきであろう。

身長差はかなりつまったとはいえ、体重差はまだまだヨーロッパ諸国と比べてある日本チーム、力に対抗するのは速さしかないという鉄則を肝に命じ、速さに徹っし単に速攻だけでなく、速守をも自己のものにし、力と大きさに対抗しなければ、上位への道はない。

体重の大小の差があるものが、同じことをやっていたのでは、優位にたてる訳がない。

速攻は日本の特技として、すでにかなりのレベルに達している残された課題は速攻の成功率をより高めることであろう。せっかくノーマークになりながら、それをミスした場面が、アジア予選でも散見された。

これに加えて、速守、とにかく速い動きの守備、前後左右に相手の動作を予知し、相手に対して行動をおこし、必要がなければ、すぐに定位置にもどる、この速守をぜひこの9ヶ月内にマスターし、速攻守を日本の得意技にすることさへできれば、メダルも夢でなく現実のものになってこよう。

更に、この速攻守を達成するためには、もっとも基本的な問題が持久力である。

他国の選手以上に速く動くことは、それだけ多く動くことを意味しよう。

他国の選手より多く動けば、一試合内の疲労はもとより、疲労の蓄積ということも重要な要素となろう、この克服することこそ、もっとも基本的な課題といえよう。

アジア予選に於いても、ホッとした体のゆるみが後半に於いて見られたこと、世界選手権でも一寸した疲労が気力を衰えさせ、またスウェーデン戦に於いても、後半スパートされたのは、これと無関係ではあるまい。

小さな体で、より大きな持久力を要求されるのは、現在の日本チームにとっては致し方ないことであろう。

以上の目標に向って、一枚岩の指導陣を全国のハンドボールファンが盛りあげ、自分自身のできる範囲で協力体制をひくことこそ、折角、36年ぶりに手にした貴重なミュンヘン行きのキップを生かすことになろう。

次代を背負う青少年のハンドボールファンに希望と夢を与え、全国のあちこちで毎日々々の日常活動でハンドボール普及に努めている人々にも活力を与えるように、球史に一つのポイントを与える意味においても、ぜひともミュンヘン・オリンピックで上位入賞を果したいものである。

ハンドボール界あげての期待をになうチームが十二分の強化と悔いのない試合振りで、オリンピックを斗うためにも、全国のハンドボールファンの協力はぜひとも必要である。

―ポスト・アジア予選③―

今こそ底辺拡充に全力を

□……『この勢いをかりて一気に底辺対策を拡充したい』と語るのは田村会長。荒川理事長もまったく同意見だ。

ここ二、三年日本協会はすべて「アジア予選」であった。あらゆる予算をこの大会へつぎこんだといってもいいすぎにはなるまい。

そのためにいくつかの活動がお留守になった。特に斯界で最も大きな課題といわれる底辺の開発が一歩も二歩も遅れた。

□……中学校対策、スポーツ少年団問題、クラブの道。どれをとっても明日の日本ハンドボール界を背負う〝重要事項〟である。

他の競技団体が大々的に全国的な中学校(生)大会を開いているのを横目でみながら斯界は実現へ踏み切れないまま時を過した。新しい全国規模の大会を開く余裕がなかったのだ。

9、10月に東京で開いた全国会議(理事会、評議員会)では地方代表の積極的な開催提案に対し執行部の態度はもう一つ歯切が悪かったが11月末になって、この問題のため専門委員会を発足させ実行へようやく前進を示した。

□……スポーツ少年団問題も完全に他競技からリードされてしまった。この失地回復は不可能に近いとみる担当記者もいるが、日本協会ではとりあえず毎夏に開かれる全国スポーツ少年団指導者大会に期待をかけており、今回の勝利で少年層に〝ハンドボール〟の名がしみわたり、興味がもたれれば……という。しかし具体的な対策はとなると早くても来春の全国会議になりそうな気配。

□……クラブの育成はブロック選手権には日本協会杯を贈っているのが精いっぱい。地方協会まかせというのが実情である。

アジア予選で大阪、名古屋(愛知)はかなりの入場券がクラブ層で捌かれたのに対し、東京周辺はパッとしなかった。

日頃のクラブ対策の強弱が数字になってさらけ出されたわけだがこの機をとらえて、OB、OGをコートへ連れもどせという姿勢をより強力に推進させなければなるまい。

学窓を出て、ハンドボールに心ならずも別れてしまったOB・OGは多い。これらの人々をこれを機会にコートに連れもどす努力を行なわねばならない。

アジア予選を見た多くのOB・OGが久しぶりにハンドボールに触れたということを各地で開いたこれをたやすことなく、日常的にハンドボールに親しんでもらう努力をしていくことも心要だろう。

□……クラブ側の意欲を過小評価してはいないか、とする消息通もいる。

例えば今年から全日本総合選手権に「社会人代表」の名で男2、女1のワクが設けられたが、日本協会は果して出場チームが名乗りをあげるかどうか不安な感じを抱いていた、と伝えられる。

実際は、男子は東西とも4ブロックの代表が出場の意思表示をしそれぞれ決定戦まで行った。

北海道のクラブチャンピオン、函館有斗OBなどは11月末わざわざ水海道市(茨城)まで代表権争いに乗りこんだほどの熱の入れようである。

□……実業団にすっかりおさえこまれているOGの意気も健在だ。

和歌山団体の成績を基準に3クラブが全日本総合の候補に推されたが、いずれも「出場の意思あり」。

どのクラブもメンバーの勤務先はバラバラ、経費はすべて自己負担、練習時間は大会前朝夜1時間づつできればよいほう、といった条件のなかで「全日本タイトルを」という気力を燃やしている姿に日本協会は応えなければなるまい。

□……もともと中学校(生)は対策にしても、スポーツ少年団問題にしても斯界は、かなり先手を打っていたことなのだ。

中学校(生)対策は昭和38年度には早々と重点施策に打ち出されていたテーマだし、スポーツ少年団は35年度に神奈川協会が主体となって準全国活動を他競技にさきがけて行っているホド。

これからみれば底辺対策は新しく組み立てられるのではなく〝復活〟ともいえる。中心となるべき普及部(担当・渡辺慶寿常務理事)は、12月4・5日全国委員会を招集して始動、いくつかの問題点を洗い出すと同時に具体的な構想の実現へ着手した。

□……「ハンドボールの正しい理解と普及」をバックボーンに普及部が中学対策以下をどのように展開していくかは大いに注目されるが、オリンピック強化成功の裏にはなけなしのサイフをはたいた〝投資〟があったことを考えると普及面に日本協会がどの程度経済的なバックアップを示すかも成否のカギであろう。

田村会長は『理想は強化費と同額、少くとも強化費の75%相当は底辺対策にふりわけたい』といっているが、スライドの作成、指導者の養成講習会の開催などごく初歩的な施策だけでも経費はかさみ、さらに中学スポーツ少年団、クラブなどの活動促進を合わせると強化費を大きく上廻る覚悟が必要だ。

□……「中学校体育指導要領」への再採用、各地におけるクラブ競技会の発足、少年ハンドボール教室の試み……。明かるい材料も揃っているが、やはり肝心なのは日本協会の熱意であろう。

底辺のことは底辺で、という考えも、ある面で間違ってはいないがここにも〝挙国体制〟がなければ基盤づくりはできない。下からの盛りあがりと上からの好リード。

アジア予選の快勝で黙っていても底辺が拡がり、たくましい根がおろされるなどと考えていたならば今回の光は、文字どおり一閃(いっせん)にしてあとかたもなく消えてしまうだろう。

今こそ底辺拡充に全力投球すべき時なのである。

そして、この栄光を次代にしっかりと受け渡す方策をたてておかなければならない。

【「ポスト・アジア予選」は次号につづく】

予断許さぬ男子の王座

今年の国内チャンピオンチームを決める第23回全日本総合選手権は12月15日から19日までの５日間東京体育館（第１日のみ駒沢屋内球技場併用）で開かれる

全日本総合選手権展望　女子も実力伯仲の激戦

この大会が東京で開かれるのは第４回（昭27）以来19年ぶり。前回までは国体開催地を持ち廻っていたものだ。

会期が冬季に移されたのをはじめ大会の方式もかなり模様替えをされた。

参加チームは男子の場合一挙にこれまでの半数（16）にしぼられ女子も限定（12）された。

いずれも日本協会、加盟団体の推せんチームであり、全試合まったく息が抜けない。

オリンピック参加が実現しムードが盛りあがっている時だけに国内最強チームの激突はハンドボール熱をいちだんと高めさせることだろう。

発表された組み合せを見ながら優勝の行方を探ってみよう。TV中継は12月19日15時30分からNHK教育TVの予定。（編集部）

男子

新五輪候補の選考兼ねる

◇参加16チームを４組に分け予選トーナメントのあと、各組勝者により決勝リーグ。

予想どおりすばらしいチームが並んだ。

どこがナショナルチャンピオンになってもおかしくない。

宿望を遂げたナショナルプレイヤーも久々に所属チームに帰って颯爽と姿を現す（有永、斉藤、大村は欠場）。

また、別掲のとおり早ければこの大会直後ミュンヘンを目指す新オリンピック候補が発表される。

激しいチームの対抗意識とともに卓抜した個人技の応酬が期待できることは国内選手権としてのこの大会の成長を物語るものでもあろう。

A組ではいきなりワクナガ薬品と大阪イーグルスがぶつかる。

大阪同士、手の内を知りつくしているうえ、GK本田（全日本）がイーグルスのユニホームで中央に初登場する。

攻撃力では本野、早川（ともに全日本）を主軸に市原、高橋、戸田、森らを揃えたワクナガがどうみても一枚上であり、イーグルスが守りでどう対抗するかがカギだ。

中央大×自衛隊勝田は順当なら中央大のもの。佐藤要、佐々木、花輪、佐藤光らでスピードは学生一という定評を得ている。しかし中央大は勝田のようなナダレこんでくるタイプに意外と弱いし、相手の力に合わせたような試合をするクセも脱けきっていない。ここをつけば勝田に勝機も生まれよう。

B組は日体大×芝浦工大の争いか。日体大は氷海（全日本）をリードマンに高橋精、松原、岩下、佐藤雄、松岡、佐藤富らオールラウンドプレイヤーとGK高橋誠が並ぶ。層の厚さも抜群である。

芝浦も張り切っている。明石、木全らで全日本学生（11月・東京）を乗り切り、若手が自信をつけたところへ新実、大江（ともに全日本）が戻ってくる。最後まで予断を許すまい。

試合巧者を並べた東京教員は全日本教員（８月・鹿児島）で３位に終っており、この大会にかけているが学生勢のスピードをかわし切れるかどうか。

セントラル自動車は本田技研（三重）の辞退によって浮かびあがった。峰、羽毛田、中村らの攻撃力に見るべきものがあるが日体大相手では荷が重そう。

C組は大崎電気×大同製鋼。優勝戦といってもおかしくはない好カードだ。

大崎は近森、東、飯田、GK下里の全日本クワルテットに近藤、篠野の両ベテラン、佐藤、林、谷口GK岩下らを配す。

大同も野田、藤中、中井（いずれも全日本）を攻守の軸に加藤、戸谷、栃原、GK柳川とスキがない。１点を争うエキサイトしたゲームになりそうだが上り坂の大同を推す声がわずかに多い。

大同にとって大阪体大は気を許せない。中村、中出、中田、桐山藤井らテクニシャンを揃え気力も充実している。

13回目の出場をはたす名門・桜丘会はクラブきっての攻守を誇るが大崎をたたくところまではいくまい。

D組はダークホースが並んだ。どこも波にのれば一気に、といったチーム。

スワロー兵庫×法政大は実力伯仲。国体（10月・和歌山）ですばらしいデキをみせた兵庫は栗山、畑、木野、井上、GK上野清らが中心。

法政は巧者荒井を先陣に田上、長谷川、吉野、小石川、GK川畑

らで柔軟な試合運びをみせる。ディフェンスが固まれば決勝リーグへ進んでも手強い存在となろう。
三景×AOK栃木はこれまでの顔合せからみても三景有利。
喜田、高梨、内藤、植田、山原武井、上平、GK西牧と気鋭が揃う。
ベスト4へ抜け出すチームの予想は難しいが三景×法政となれば三景、三景×兵庫となれば兵庫とみたい。

実業団に挑む日体大

大きな波乱がなければ決勝リーグへ勝ちあがる4強はワクナガ、日体大のほか大同又は大崎、三景又はスワロー兵庫となる。
組み合せは第2日終了後に発表されるが、こう並べてみると6月の日本実業団リーグ（名古屋）でつばぜりあいを演じたワクナガ×大同又は大崎の決戦となる公算が強い。
日体大は初戦の相手がどこになるかでその後の展開も変わってくる。キャリアにおいて実業団勢に一歩をゆずるだけに北川監督のベンチワークも一つのポイント。
最終戦までもつれにもつれ得失点差争いというケースも充分考えられよう。

◇予選トーナメント組み合せ

【男子】
ワクナガ薬品（大阪）
大阪イーグルス（大阪）
中央大（東京）
自衛隊勝田（茨城）
日体大（東京）
セントラル自動車（神奈川）
東京教員（東京）
芝浦工大（東京）
大崎電気（埼玉）
桜丘会（愛知）
大阪体大（大阪）
大同製鋼（愛知）
スワロー兵庫（兵庫）
法政大（東京）
AOK栃木（栃木）
三景（東京）

【女子】
大崎電気（埼玉）
日体大（東京）
日本ビクター（茨城）
美和ク（東京）
東京重機工業（東京）
東京教大（東京）
田村紡（三重）
鹿児島ク（鹿児島）
ブラザー工業（愛知）
徳山ク（山口）
山陽女子高（広島）
東京女体大（東京）

女子

示せ、後続の意気

◇参加チームを3組に分け予選トーナメントのあと、各組勝者により決勝リーグ。
トッププレイヤー14人が世界選手権で欠け、しかも留守軍で国体1位となった大洋デパート（熊本）が勤務の都合で出場を見合せたため、内容的にはちょっと淋しくなりそうだ。
反面、優勝争いは混戦模様、その意味での面白味は充分にある。
全体的な展望をまずしてみると——大崎電気も東京重機も田村紡も「絶対」の自信はあるまい。
ベストメンバーの日本ビクターも、国体で勝っていたならともかく、若い大洋デパートにおさえつけられており〃本命〃には推しがたい。ブラザー工業もいぜん不安定。打倒実業団というには気がひけようが学生勢にとってチャンスであることは事実。
日体大は早くからこの大会に照準をあてて張り切っているというし、東京教大の戦力アップも相当なものだ。
高校界代表の山陽女高が面白いところにからんだ。
東女体大は全日本学生の準優勝校。ヘタな試合はできない。
クラブ勢は曲者が並んだ〃顔〃の美和ク、来秋の国体に備える鹿児島ク、和歌山国体で話題をさらった徳山ク。いずれも成算あってのエントリー。〃一発〃を狙っての斗志は侮れまい。
そうはいうものの練習環境による体力、戦力のちがいから実業団の進出はまちがいないところではなかろうか。
順当ならば日本ビクター、東京重機、ブラザー工業。
ビクターはようやくチームとしてのまとまりがでて来た。
蓮見姉、江川、八重樫らのベテランに大塚、谷沢、高野、蓮見妹ら若手が溶けあい攻守とも鋭い。
東京重機はエース牧野と働き手の滝口、古佐原が欠けるのが痛いが鷺谷、村上、GK長岡らでどうにか調子は上向きという。
有力メンバーを揃えながらもう一つカベを突き破れないブラザー工業は、この大会あたりで花を咲かせたいところ。
金村、原川、藤浪、長塚、森本鳥井、GK佐藤とベストメンバーが揃えば優勝に手が届かぬハズがない。
この三チームに代るとすれば大崎電気×日体大の勝者、田村紡、東京教大あたりだろう。
山陽女高が一般チームにはさまってかっての半田高（愛知）静岡城北高、菊池農高（熊本）などのような旋風を巻きおこすかどうか。大きな話題である。
クラブ勢の中では鹿児島クが注目される。姫野、水上、GK松田ら東女体大で活躍していた若手OGが中心である。
精鋭で固めた全日本が本場・ヨーロッパでも高い評価を得ているだけに後に続くこの大会の内容は今後の女子界の消長にもつながるもので、各チームの奮起によって男子に劣らぬ白熱した好内容の連続を待望したい。

来年も東京で開催

日本協会は、来年の第24回全日本総合選手権を12月6日から10日まで東京体育館を主会場にして開くことを決めた。

日本"本番"に自信の試合ぶり

全日本女子、欧州転戦第1報

1214 勝戦

【グロニング(デンマーク)ほか欧州各地にて日本女子選手団コーチングスタッフ(山田監督　宇津野・井コーチ)発】日一日と世界選手権が迫るなかで元気に各地を転戦。6年近い国際経験の空白を一気に埋めるべく選手も意欲的な攻守を示し、多くの"収獲"を身につけている。西ドイツ戦までの通算成績は14戦12勝2敗。12月1日深夜オランダ入りする予定だ。

第1戦で『当面の敵』降す

遠征第1戦は11月3日夜グロニング(デンマーク)でデンマーク・ナショナルと行い快勝、幸さきよいスタートを切った。

日本 14（6－6 8－6）12 デンマーク

日本チームは2日(日本時間)に母国を発ったばかり、いきなり数年間のブランクを感じさせないスピードにあふれた攻守で善戦、鮮やかに勝利を奪った。両チームは12月の世界選手権の第1次リーグで顔を合せる。(この項UPI・共同=メンバー未着)

後半、一気にスパート

遠征第2戦はスカンデルヨルグ(デンマーク)のキエルラップ・ホールに約一千の観衆を集め、フンデル・GFクラブと行った。

日本 19（12－7 7－3）10 フンデルGF

得	【日本】		【フンデル】	得
0	北岡	GK	ラウルセン	0
0	小原	GK		
5	垂水	FP	L・ドクトール	4
0	米	FP	ハンセン	0
8	牧野	FP	マドセン	0
1	寺尾	FP	ソーレンセン	3
1	三毛	FP	リッター	0
2	島田	FP	ムンク	2
0	滝口	FP	オルソン	0
1	古佐原	FP	エウギャルド	1
1	渡辺	FP	ラムツセン	0
0	三浦	FP		
19	(1) 7MT		(6)	10

▽その他の出場者　FP三宅得0

相手はデンマーク一部リーグのA級チームだったが、はるかに日本の動きが優った。

しかし、8本の7MTを課せられ(このうち6ゴール)たために前半は思うように点差を開けなかった。

前半同点の熱戦

遠征第3戦はスウェーデンでの第1戦として11月7日ボーレンゲのマッセル・ホールに五百人の観衆を集め地元の強豪ボーレンゲ・HKと行った。

日本 15（7－7 8－4）11 ボーレンゲ・HK

得	【日本】		【スウェーデン】	得
0	小原	GK	※ビヤルビイ	0
0	北岡	GK		
3	垂水	FP	※B・カールソン	4
3	渡辺	FP	ビョーグランド	0
6	牧野	FP	フライドマン	1
0	米	FP	S・カールソン	0
0	古佐原	FP	E・カールソン	5
3	島田	FP	ヨハンソン	0
0	三浦	FP	リンドホルム	0
0	寺尾	FP	オッテム	0
0	三毛	FP	ヤルロブソン	0
		FP	バーグ	1
15	(3) 7MT		(4)	11

相手チームの※印はナショナルプレイヤー(以下同じ)。スウェーデンは4月の予選で、西ドイツと対戦していることからも日本にとってはスウェーデンの対戦は貴重。

デンマーク同よう要所で7MTをとられ接戦となったが、後半は日本の走り勝ち。

この日審判をつとめたH・カールソン氏はベテランの審判でアジア予選を担当する人。

今夜の試合の入場料は450～500円だった。

鮮やか、4連勝飾る

遠征第4戦はマッチンナッカ・スポーツホールに約九百の観衆を集めストックフォルム選抜と行った。

日本 20（10－3 10－8）11 ストックフォルム

得	【日本】		【ストックフォルム】	得
0	小原	GK	ヘルステッド	0
0	北岡	GK	リンドバーグ	
0	枝尾	FP	※コランド	3
0	三宅	FP	※メットハムマール	0
5	垂水	FP	ペッターソン	0
1	米	FP	カムペンボーグ	0
8	渡辺	FP	ハール	0
2	牧野	FP	※ノードスドリョーム	5
0	三浦	FP	アグレル	1
0	寺尾	FP	アルゲクランツ	2
2	三毛	FP	オルソン	0
2	島田	FP	カールソン	0
20	(0) 7MT		(5)	11

▽その他の出場者　FP古佐原0

日本は前半からスパート渡辺―垂水の大洋コンビを軸に着々と加点、快勝した。ノードストリョームはスウェーデンナショナルの主力、なかなかシャープなプレーを見せた。

ブカレスト大に初の黒星

遠征第5戦はルーマニアでの第1戦として11月10日ルーマニア・チャンピオンブカレスト大学とブ

カレスト市のサラフロレスカ体育館に約三百の観衆を集めて行い、日本は初黒星を喫した。

ブカレスト大学 18（7—7、11—7）14 日本

	【ブカレスト】	得	【日本】	得
GK	ガビ	0	小原	0
GK	ルオレティア	0	北岡	0
FP	※アーギイル	6	枝尾	2
FP	リダ	1	三宅	0
FP	エレナ	1	垂水	4
FP	※ドワナ	7	米	0
FP	ニクリーナ	2	渡辺	7
FP	ミレラ	0	島田	1
FP	M・マリア	1	三毛	0
FP	イオアナ	0	牧野	0
FP	オウスト	0		
FP	L・マリア	0		
		18（6）		14

ルーマニア国内リーグで初優勝したブカレスト大。さすがにたくましい攻守を示した。特に速い動きと巧妙なショートパス、ポストプレーは参考になった。

しかし「勝てない相手ではない」（宇津野コーチ）し、もう少し速攻が決まればモノにできたろう。

この試合でも7本の7MTをとられ6点を失うなど防禦面における判定解釈にとまどいを感じる。

本大会までに欧州のジャッジングに慣れることが急務だ。

ルーマニアナショナルに惜敗

遠征第6戦は11月13日サラフロレスカ体育館でルーマニアナショナルと行った。

ルーマニア 18（9—7、9—5）12 日本

	【ルーマニア】	得	【日本】	得
GK	クリモブスキー	0	北岡	0
GK	ブザス	0	小原	0
FP	マギヤリ	0	枝尾	1
FP	バルコイアール	1	垂水	2
FP	アーギィル	7	米	1
FP	ミロス	2	渡辺	5
FP	オーセア	3	牧野	1
FP	スゼクリイ	3	島田	2
FP	ズース	0	三宅	0
FP	イバデューラ	0		
FP	ムンテアル	1		
FP	フルコワ	1		
		18（1）	7MT	12（0）

今遠征の一つの〃ヤマ場〃とも云える試合だった。立ちあがりルーマニアは2、3分にゲット、日本も9分渡辺が返し接戦模様、一進一退のあと日本は15分島田、16分米で4—5。このあとルーマニアの左腕アーギイル（ブカレスト大）に連続ゴールを許したのが痛かった。

日本もひるまず食い下ったものの2点差までが精いっぱい。後半開始後2ゴールを許して11—7とされ相手に主導権を与えてしまった。終了間ぎわ12—15から3点連取されたのも反省の材料。

問題の7MTはともかくも2本におさえ（失点1）ることができた。エリア内のラインクロース、シュート時のひっかけは文句なく吹笛され、大柄な選手に押してまれるとどうしても日本の体格ハンデがマイナスになってくる。

ルーマニアは日本同ようディフェンスは早いつぶし、強烈なアタックを多用し、相手の攻撃の芽を反則で（7MTにはならない程度の……）逃れる策戦が実に巧妙である。

敗れたとはいえ世界選手権の優勝候補と互角に試合を進め得たことは日本の速い動きとフォーメーションプレーが充分に世界で通用することを確認できた。なお、レフェリーはハンガリーのケステリイ、フロップの両氏。

練習試合は分ける 日本×ルーマニアナショナルチームの練習試合は11月14日行われ13—13（前半日本7—6）で引き分けた。

日本の得点は牧野4、垂水、米、古佐原、島田各2、三毛1。

フランス第1戦は一方的

遠征第7戦はフランスにおける第1戦として11月17日ボルドー市のスポーツパレスに約千五百の観衆を集めアクイタイヌクラブと行った。

日本 26（14—3、12—5）8 アクイタイヌ

	【アクタイヌ】	得	【日本】	得
GK	レスガルド	0	北岡	0
GK	ボードワン	0	小原	0
FP	※クロス	2	米	1
FP	※カルレ	4	渡辺	7
FP	タルシュール	0	牧野	4
FP	ヴイマール	1	三毛	2
FP	ボルダス	0	古佐原	1
FP	M・マンゴル	0	島田	7
FP	デュコー	0	枝尾	1
FP	ガリーギン	1	滝口	1
FP	D・マンゴル	0	三浦	0
FP	デュボルグ	0	寺尾	2
		8（1）	7MT	26（1）

日本のディフェンスはまったくアクイタイヌにつけいるスキを与えぬほどみごとだった。特に全試合のうち半分以上出場したGK北岡の大たんな守りとFP陣の鋭い出足は目についた。

攻撃面でも7点を叩き出した左腕の渡辺をはじめ全員がスピードにあふれた組織攻撃を示しスタンドの拍手をあびた。（この項フランスポーツ紙〃レ・キプ〃から）

▽遠征第8戦（11月19日・アングレーム）

日本 30（16—3、14—0）3 アングレーム選抜

▽第9戦（11月21日・パリ）

日本 15（7—9、8—4）13 フランスナショナル

▽同第10戦（11月23日・パリ）

日本 13（7—3、6—4）7 フランスナショナル

西ドイツでも4連勝

▽同第11戦（11月25日・アルステルドルフ体育館）

日本 9（3—4、6—3）7 ハンブルグ選抜

▽同第12戦（11月26日・デュッセルドルフ）

日本 18（7—8、11—5）13 ニーダーライン選抜

▽同第13戦（11月28日・ミンデン）

日本 16（6—7、10—0）7 アイントラハト

▽同第14戦＝前哨試合最終戦（11月29日・ショネンベルグ体育館）

日本 18（8—2、10—8）10 西ベルリン選抜

（注）第8戦以降の詳報は次号。

渡辺が打撲傷 欧州遠征で好調なプレーをつづけていた渡辺須和子選手は11月26日の試合で相手のJ・ワルツラウド選手と激突、ヒザにかなりの打撲をうけ世界選手権出場が危ぶまれている。

全日本女子選手団

監督	山田　計	(49)	
コーチ	宇津野年一	(48)	
コーチ	井　薫	(34)	
GK	小原　名苗	(23)	大洋デパート
	北岡　千賀	(23)	愛知教員ク
FP	枝尾　清女	(24)	大洋デパート
	三宅美智子	(24)	大洋デパート
	垂水　秀代	(23)	大洋デパート
	渡辺須和子	(23)	大洋デパート
	米　恵美子	(23)	大洋デパート
	滝口　治代	(22)	東京重機
	牧野　凉子	(22)	東京重機
	三毛　直子	(22)	田村紡
	寺尾由美子	(22)	大崎電気
	三浦　朝子	(21)	大崎電気
	島田　夏枝	(21)	大洋デパート
	古佐原ひろ子	(21)	東京重機
随行員	中川　葵		東急航空

☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

海外トピックス

杉山　茂

東ドイツ、強味示す
～カルパティア杯～

数ある国際大会のなかでも屈指のビッグエベント——第12回カルパティア・マウンティンカップは今年もクルージュ（ルーマニア）で10月25日から31日まで女子、11月9日から14日まで男子がそれぞれ激戦を展開した。

世界選手権（12月・オランダ）の前哨戦ともいうべき女子は優勝候補の東ドイツ、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴにオランダとソビエトが出場、リーグ戦で争われた。

予想どおり東ドイツが抜群の攻撃力で勝ち星を重ね、最終戦で地元、ルーマニアの奮起にあい引き分けたものの危気なく優勝を飾り〝ワールド・チャンピオン〟がますます有力となって来た。

ハンガリー　13―6　オランダ
東ドイツ　18―9　ユーゴ
ルーマニア　16―10　ソビエト
東ドイツ　13―10　ハンガリー
ユーゴ　10―8　ソビエト
ルーマニア　20―9　オランダ
東ドイツ　19―8　オランダ
ハンガリー　13―9　ソビエト
ルーマニア　13―11　ユーゴ
ユーゴ　6―5　オランダ
東ドイツ　17―12　ソビエト
ハンガリー　15―9　ルーマニア
ハンガリー　14―7　ユーゴ
オランダ　8―6　ソビエト
東ドイツ　14（分）14　ルーマニア

【順位】①東ドイツ4勝1分②ハンガリー4勝1敗③ルーマニア3勝1敗1分④ユーゴ⑤オランダ⑥ソビエト

男子はユーゴが優勝

一方、男子は7ケ国8チームが参加、連日三千をこすファン注目のうちに行われ、予選リーグ（2組）では世界チャンピオンのルーマニアをはじめユーゴ、ハンガリー、西ドイツのオリンピック出場決定国が順当勝ちした。

決勝リーグははげしい星のつぶし合いの末、ユーゴが2勝1分で1勝2分のルーマニアをおさえ優勝した。

ハンガリーの充実とノルウェーの健斗も目立った。

なお、個人の得点争いはグルイア（ルーマニア）とマロシ（ハンガリー）が26点をマーク、1位を分けあった。

▽予選リーグA組
ルーマニア　15―12　ノルウェー
西ドイツ　22―13　フランス
西ドイツ　19―15　ノルウェー
ルーマニア　26―16　フランス
ルーマニア　19（5―7、14―8）15　西ドイツ
ノルウェー　24―11　フランス

▽同B組
ユーゴ　21―16　ルーマニアB
ハンガリー　27―16　スペイン
ハンガリー　19―16　ルーマニアB
ユーゴ　29―15　スペイン
ユーゴ　24（13―10、11―5）15　ハンガリー
ルーマニアB　20―17　スペイン

▽決勝リーグ
ユーゴ　18（7―7、11―9）16　西ドイツ
ルーマニア　19（10―11、9―8）19　ハンガリー
ハンガリー　19（7―9、12―10）19　西ドイツ
ユーゴ　17（8―7、9―10）17　ルーマニア

【順位】①ユーゴ②ルーマニア③ハンガリー④西ドイツ

なお5位以下は順位決定リーグの結果⑤ノルウェー⑥ルーマニアB⑦スペイン⑧フランスとなった。

ハンガリー、東ドイツ食う

オーストリア国際トーナメント（男子）は11月1日から3日までウィーンに4ケ国が参加して開かれハンガリーの進出に注目が集った。

ハンガリー　20（11―5、9―5）10　オーストリア
東ドイツ　22（12―5、10―4）9　スイス
オーストリア　12（9―5、3―6）11　スイス
ハンガリー　21（12―8、9―7）15　東ドイツ
ハンガリー　23（11―6、12―11）17　スイス
東ドイツ　20（9―4、11―4）8　オーストリア

【順位】①ハンガリー②東ドイツ③オーストリア④スイス

ヨーロッパ杯の組合せ

第12回男子ヨーロッパカップの組み合せが発表された。

前回優勝のグンメルスバッハ（西ドイツ＝今春4月来日）はリスボン・ク（ポルトガル）を抽きあて楽勝が予想され、アジア予選に出場したホフマン、ヴァングロビッツらの所属するハポエル・ペタティクバ（イスラエル）はハフナルフョルド（アイスランド）と、またL・エリクソン、C・ストリヨームらのヘルラス・ストックフォルム（スウェーデン）はインターハースタル（ブルガリア）と対戦する。

このラウンド屈指のカードはMAI・モスクワ（ソビエト）とGWダンケルセン（西ドイツ）だろう。

日体、中央破り4連勝飾る

女子も日体、完ぺきな攻守

全日本学生

第14回（女子第7回）全日本学生選手権は11月3日から7日までの5日間東京・駒沢屋内球技場（第1、第2日駒沢体育館併用）に男子32校、女子10校が参加、トーナメントで優勝を争った。

オリンピックアジ地域予選を一週後に控えて熱戦が期待されたが、意外なほど盛りあがらず平凡な内容に終始した。

男子は2回戦で前回準優勝の同志社（関西）が名城（東海）に逃げ切られた小波乱のほかは有力校が順当に勝ち残り、結局ベストフォアは関東勢が独占、予想どおり日体—中央の対決から日体が後半の中央の反撃をかわし4年連続4度目の学生チャンピォンとなった。

女子は関東4校が関西、東海勢を制し、3年つづけて日体—東女体大の決勝となったが日体が得意の速攻で快勝、2年連続6度目の優勝を遂げた。日体の男女優勝は2年連続3度目。

大阪経大、早稲田を破る

▽男子1回戦

芝浦工大（関東）	23	9—3	14—5	8	京大（関西）
東京教大（関東）	20	9—4	11—3	7	金沢工大（北信越）
九州産大（九州）	18	10—6	8—8	14	甲南（関西）
中京（東海）	21	7—3	14—3	6	日大（関東）
関大（関西）	36	13—3	23—9	12	東北大（東北）
日体（関東）	25	15—7	10—1	8	仙台大（東北）
関学（関西）	23	9—7	14—6	13	福岡大（九州）
国士館（関東）	22	11—7	11—8	15	愛知教大（東海）
大阪体大（関西）	38	17—5	21—2	7	富山大（北信越）
立教（関東）	14	3—5	11—8	13	東北学院（東北）
京都産大（関西）	19	9—5	10—4	9	山口大（中四国）
法政（関東）	29	18—3	11—4	7	岐阜大（東海）
大阪経大（関西）	8	5—3	3—2	5	早稲田（関東）
名城（東海）	19	12—6	7—12	18	東京学芸大（関東）
同志社（関西）	27	16—4	11—4	8	西南学院（九州）
中央（関東）	14	8—5	6—8	13	松山商大（中四国）

○……順当な結果のなかでスタンドを沸かせた試合が二つあった。

大阪経大×早稲田。ともによく走ってテンポのある好試合となり早稲田が先手をとって進んだが関西1位の自信をもつ大経大は22分貝原のゲットで3—3。

そのあと26分津川、29分20秒貝原とたたみかけて優位を奪った。

早稲田は後半3分7MTの成功で反撃の態勢をととのえるかにみえたが、大阪経大は牛屋が9分から連続3ゴールする活躍で試合のペースを握りなおしディフェンスの健斗で早稲田を押し切った。

○……優勝候補・中央に松山商大が食いさがった。中央は15分4—1と主導権を握ったが、松山も粘り22分東のゲットで5—5。気をとりなおした中央は25分から連続3ゴールしてリードした。

後半は一進一退、中央にもうひとつピリッとしたところのないスキを松山は狙い14分10—11まで追いこんだ。ここで中央はまた3点をあげ突き放し、29分14—12から佐々木がダメを押した。

○……このほかでは名城×東京学芸大がもつれた。学芸大は前半ディフェンスのもろさをつかれて6点差をつけられたが、後半激しく反撃20分15—16。しかし名城は24分、26分2点を加え辛くも逃げ切った。

期待された仙台大は前半の健斗が精いっぱい、金沢工大もほとんど勝機はなかった。

名城、同志社をかわす

▽同2回戦

日体	26	12—5	14—6	11	関学
大阪体大	21	9—7	12—5	12	国士館
京都産大	13	6—1	7—3	4	立教
法政	12	5—2	7—3	5	大阪経大
芝浦工大	20	9—8	11—7	15	東京教大
中京	19	11—2	8—2	4	九州産大
中央	20	10—3	10—8	11	関大
名城	15	9—7	6—6	13	同志社

○……名城が同志社を食う波乱があった。名城の立ちあがりは好調、1分飼沼のゲットを口火に8分までに5点をたたき出した。同志社にしてみれば〝考えるま〟もない失点だったろう。15分すぎかたようやく攻撃にテンポがでてきたが、2点差まで追うのやがやっと。後半も名城の堅実なプレーに追いこんでは突き放されるという試合ぶりで25分12—13で逆転の期待をもたせながら15秒後名城、福

田のシュートを許し、ついに名城が逃げ切った。

○……法政×大経大のせり合いはこの日いちばんの内容だった。

1−2とリードされた法政は15分小石川の7MTでタイとしてから落ち看き16分、21分荒井の巧技と22分小石川のゲットで5−2と主導権を握り、後半いちど2点差まで詰められながら優位をキープ25分以後の鮮やかな連続攻撃につなげた。

○……京都産大が立教を破った。今春1部入りを果たし上り坂の京都産大は発らつとした攻守で立教を圧倒、特に大原の鋭い攻撃力は目立った。

立教は前半26分に初ゴールという精彩のなさで、新進−斜陽の対照があまりにもハッキリしていた。

往年の黄金カード日体×関学も前半9分4−4まで、その後は日体が速攻を爆発させて快勝、関学はなすがままにゆさぶられた。

大体大、日体に及ばず

芝工大、執念のベスト4

▽同準々決勝

日体 12（6−7、6−2）9 大阪体大

○……日体を目標に精進する大体大の気力は、立ちあがりたえず先行を許しながらすぐに追いつく粘りに実り好試合となった。

得	【日体】		【大体】	得
0	高橋誠	GK	逢坂	0
0	野村		宍倉	0
2	高橋精		藤井	0
0	喜井		中田	2
1	松原		桐山	0
0	岩下	FP	阪本	0
1	佐藤		中出	2
4	松岡		中村	4
4	浅原	（審・斉藤 近藤）	丸山	0
0	細木		福永	1
0	藤田		坂本	0
0	細江		山内	0
12（1）		7MT		（4）9

中盤からはむしろ大体大のペースで16分中田、20分中出、24分福永のゴールで1点づつリード、26分には中村の7MTで7−5と優位に立った。

○……試合巧者の日体は前半終了直前松岡がゲット、6−7。結果論だがこの1点はその後の戦局に影響する貴重なゴールであった。

後半に入ると日体はすぐ反撃に転じ1分浅原でタイ、5分と7分（7MT）高橋精の巧技で主導権を奪い返した。

守りの動きもよくなり、大体大に得点機を与えず20分すぎ9−8から浅原の連続得点で勝利を決定づけた。大体大の進境が印象づけられた一戦。

法政 6（3−2、3−3）5 京都産大

得	【法政】		【京都】	得
0	佐藤	GK	森	0
0	川畑		奥谷	0
0	荒井		林	2
1	小林		菅	0
1	小石川		垣内	0
3	田上	FP	針生	0
1	長谷川		福井	1
0	吉野		戸田	1
0	川島		長谷川	0
0	柳		滝本	0
0	井手		大原	1
0	太田		西沢	0
6（2）		7MT		（0）5

○……前半10分互いの動きをさぐりあうだけでノーゴール、11分になって法政はようやく小石川がゲット、16分には7MT田上が1点を加えた。

京産大は、さして好調とは思えぬ法政ディフェンスを攻めあぐみ21分福井が初ゴールという貧攻、さらに3−1から29分林が1点を返して一応勝負を後半にかけた。

法政は後半開始後いきなりスパート、相手の反撃を最小限におさえて15分6−4としたがその後ピタリ攻撃がとまり、20分戸田に返されて危かったが、辛くも逃げこんだ。

重苦しいだけで迫力のない凡戦。

中央 21（12−4、9−6）10 名城

得	【中央】		【名城】	得
0	井上	GK	竹内	0
0	吉近		高橋	0
5	佐藤要		桑島	2
1	小井土		田中	1
7	佐々木		飼沼	4
2	佐藤光		阪野	0
3	白石	FP	福田	1
1	花輪		川口	2
2	田中		石塚	0
0	会田		佐藤	0
0	山村		松井	0
0	村田		江崎	0
21（0）		7MT		（0）10

○……勝負はあっさり前半で決まった。中央はスピード豊かな攻撃から名城ディフェンスをやすやす割り20分には9−1。名城は前半終り頃から後半10分頃まで反撃の気勢をあげたに留った。

芝浦工大 12（4−0、8−5）5 中京

得	【芝工】		【中京】	得
0	吉田	KG	福井	0
			小林	0
1	木全		長縄	2
6	明石		夏目	1
2	細江		小島	0
0	門		成田	0
1	里田	FP	小川	2
2	三部		梶村	0
0	古川		小玉	0
0	宮保		高橋	0
			松本	0
			銅城	0
12（1）		7MT		（2）5

○……部員不足のうえに主軸の大江、新実を全日本に送りこんだ芝工大。OB連中は「1回でも勝てば……」と思ったそうだが、執念で準決勝まで勝ちあがった。名門の意地ともいえたし、みかたをかえれば今大会のハイライトともいえた。

○……それにしても中京は不甲斐なかった。後半5分まで実に35分間ノーゴールというのはどうしたわけか。

かつての中京は、OB選手一丸になって打倒関東に燃えていたものだ。奮起を待ちたい。

学生の試合を大きく左右するのはやはり「気力」の一語につきる。

5位に大阪体大決まる

▽同5位決定戦予備戦（2試合）

大阪体大 22（12−3、10−4）7 名城

中京 9（3−5、6−1）6 京都産大

▽同5位決定戦

大阪体大 16（10−5、6−6）11 中京

得	【大体】		【中京】	得
0	逢坂	GK	福中	0
0	宍倉	GK	小林	0
2	藤井	FP	長縄	2
2	中田	FP	小島	3
0	桐山	FP	夏目	0
0	阪本	FP	成田	4
1	中出	FP	小川	1
5	中村	FP	梶村	0
0	山田	FP	小玉	0
0	丸山	FP	渡辺	0
6	福永	FP	松本	0
0	坂本	FP	銅城	1
16	(1)	7MT	(2)	11

日体、法政に制勝

▽同準決勝

日体 13（6－2、7－4）6 法政

得	【日体】		【法政】	得
0	高橋誠	GK	川畑	0
0	野村	GK	佐藤	0
4	松原	FP	荒井	3
1	岩下	FP	小石川	1
1	喜井	FP	田上	1
1	高橋精	FP	長谷川	0
0	佐藤雄	FP	吉野	0
1	佐藤富	FP	太田	1
4	浅原	FP	小林	0
0	細江	FP	川島	0
0	藤田	FP	柳	0
1	松岡	FP	井手	0
13	(0)	7MT	(2)	6

○……法政は好スタート。荒井の巧技で4分2－1を先行したのだが、なんとこのあと30分間ノーゴール。日体は9分松原で追いついたあと着々とポイントをあげ引きはなした。

後半3分7MT（田上）で法政は3－6とし反撃に期待をもたせたが、またしても17分近く無得点という凡攻、せっかくよい動きを見せしながら波にのった攻撃を見せられず自滅したのは惜しい。

中央、後半に突き放す

中央 18（9－7、9－3）10 芝浦工大

得	【中央】		【芝浦】	得
0	井上	GK	吉田	0
9	佐藤要	FP	木全	1
6	佐々木	FP	明石	4
0	白石	FP	細江	2
0	佐藤光	FP	門富	2
1	小井土	FP	黒田	0
0	田中	FP	三部	1
2	花輪	FP	古川	0
0	会田	FP	宮保	0
0	今関	FP		
0	塩田	FP		
18	(2)	7MT	(1)	10

○……15分3－0と中央がリードした時は味気ない準決勝に終るかにみえたが、そのあと芝工大が追撃、もつれた戦局になった。勝負のヤマは後半5分10－9から中央が佐藤要のゲットを口火にチャンスを確実に得点に結びつけた場面にあった。

特に13分以後佐々木、花輪のコンビが多彩なプレーでたたみかけるようにゴールを割った3得点は鮮やかで20分15－9と開いた。

手うすな陣容でベスト4まで勝ち残った芝工大の健斗は大いに賞されてよいだろう。

3位は法政、4位芝工大

▽同3位決定戦

法政 20（9－7、11－7）14 芝浦工大

得	【法政】		【芝工】	得
0	川畑	GK	吉田	0
0	佐藤	GK		
7	荒井	FP	明石	4
1	小林	FP	門富	0
3	小石川	FP	細江	3
0	太田	FP	木全	5
3	田上	FP	三部	0
0	長谷川	FP	黒田	1
5	吉野	FP	古川	1
1	柳	FP	宮保	0
0	川島	FP		
0	井手	FP		
20	(0)	7MT	(1)	14

中央、後半の追撃及ばず

▽同決勝

日体 12（7－3、5－5）8 中央

得	【日体】		【中央】	㊕
0	高橋誠	GK	井上	0
0	野村	GK	吉近	0
4	松原	FP	佐藤光	0
1	高橋精	FP	佐藤要	3
0	佐藤雄	FP	花輪	0
1	岩下	FP	佐々木	3
2	佐藤富	FP	小井土	0
1	松岡	FP	白石	1
1	浅原	FP	田中	2
0	藤田	FP	会田	0
2	喜井	FP	塩田	0
0	細江	FP	村田	0
12	(1)	7MT	(0)	8

○……関東学生（10月）の雪じょくを期す日体、真価を問われる中央。

斗志むき出しの両校の対決は最終日になってようやくコートサイドの熱気を誘った。

中央は1分白石のゲットで先行意気あがるかにみえたが、日体も2分松岡で振り出しに戻したあと18分までに連続6ゴール、あっさり主導権を握った。

中央は、日体が珍しくスローペースの試合に持ちこんだため、攻撃のテンポを狂わされ20分すぎ佐々木の連続ゴールで点差をつめただけだった。

○……後半、10分までに中央が3本のシュートを失敗したのに対し日体は4回の得点機を活かし9－3。

〝逆転〟に自信をもつ中央は12分佐藤要、13分と18分佐藤光と矢次早にシュートを決め3点差に迫ったが、日体はその後を慎重に守り切り関東リーグの雪じょくを檜舞台でとげ学生王座をがっちり確保した。

ベスト4は関東勢占める

地方勢、すべて姿を消す

東京教大、大体大破る

▽女子1回戦（2試合）

甲子園学院（関西） 18（9－0、9－2）2 日女体大（関東）

中京女大（東海） 19（9－3、10－1）4 福岡教大（九州）

○……両試合とも力の差がはっきりしすぎ正直にいって勝負にならなかった。初登場の福岡教大はギリギリのメンバーだったが元気な試合ぶりで17分3－5まで追いすがったがその後は疲れものぞき大崎、安井らを中心とした中京女攻撃陣に走りまくられた。

▽同準々決勝

日体（関東） 16（6－2、10－1）3 中京女大

○……関東・東海1位同士の対戦も、日体が立ちあがり一気に6ゴール、あっ気なく勝負が決まった。

中京女も悪いデキではなかったが、日体の当りの強い守りにもぐりこめず結局はスピード差が勝負を色分けた。

東京教大（関東）6（3－0、3－2）2 大阪体大（関西）

○……期待の一戦だったが大体大の攻撃陣が完封され予想外の凡戦に終った。

東教大は9分畑中、10分山本（7MT）で優位に立ち、その後の展開に余裕を見せた。大体大は前半11本のシュートが実らず後半2分の7MT（玉岡）が初得点、反撃らしい反撃もみせずに敗退した。

東京学芸大（関東）4（1－1、3－1）2 中京（東海）

○……6分1－1のあと後半6分まで両校無得点という貧打戦。もう少し積極さがなければ学生界のレベルアップなどとても望めまい勝負は後半15分2－2から学芸大が16分長嶺、17分浅井がゲット、メドをつけた。

東女体大（関東）13（5－5、8－5）10 甲子園学院

○……内容はともあれ活気のある攻防戦だった。

先手は甲子園が辻、白井らでとり6分3－0。東女体大はゆっくり反撃の機を狙い10分2－4、20分3－5と追いあげたあと21分高橋、22分本告がでタイ、勝負を後半にかけた。

後半6分東女体大は6－6から7分堀江、8分川井で初めて優位に立ち、中盤は激しく得点を入れあう熱戦を演じたが、結局このリード点がモノを云い東女体が健斗の甲子園を破った。

東京教大、後半に力つく

東女体は学芸大に楽勝

▽同準決勝

日体 11（5－5、6－4）9 東京教大

得	【日体】		【東教】	得
0	石黒	GK	黒田	0
0	大工原		松井	0
3	永田	FP	渡辺	0
1	赤塚		韮沢	3
0	小貫		岡田	0
5	木村		継	1
1	嶋田		山本	0
1	福田		坂倉	3
0	坂本		川島	1
0	岩本		畑中	1
0	松本		橋本	0
0	鈴木		松本	0

（審・近藤・斉藤）

11（0）7MT（0）9

○……事実上の決勝といわれるにふさわしい試合だった。

東教大は立ちあがり2－0、後半開始直后7－6と2回つかんだ優位をキープできなかったのが惜しまれる。

ここらあたりが〝飛躍の前に立ちはだかるカベ〟の厚さであろうか。

東京女体 11（5－0、6－3）3 東京学芸大

得	【専女】		【学芸】	得
0	増田	GK	小林	0
0	三上			
2	高橋	FP	浅井	0
0	堀江		川島	1
6	川井		長嶺	0
0	勇次		山元	1
0	尾良		初見	1
1	岩間		大野	0
1	塩谷		大谷	0
0	西田		伊藤	0
1	本告		河又	0
0	石井			

11（0）7MT（0）3

○……攻守に一日の長がある東女体大の順当勝ち。

学芸大は相手ディフェンスに動きを完全に読みとられ、後半15分までなすべがなかった。

東京教大、3位を確保

▽同3位決定戦

東京教大 11（4－2、7－3）5 東京学芸大

○……学芸大は12分まで2－1とアヘッド、東教大は14分から連続ゴールしてあっさり劣勢をはね返し、後半は坂倉の活躍で3位を決めた。

▽同決勝

日体 16（4－6、12－1）7 東女体大

得	【日体】		【東女】	得
0	大工原	GK	増田	0
0	石黒		三上	0
4	永田	FP	高橋	3
0	赤塚		堀江	3
3	小貫		川井	1
2	嶋田		屋良	0
4	木村		岩間	0
1	福田		塩谷	0
0	八木		西田	0
2	岩本		本告	0
0	小林		石井	0
0	高橋		石塚	0

（審・岡村・斉藤）

16（1）7MT（0）7

○……攻防両面でのスピード差がれき然。お粗末な決勝戦だった。

日体は立ちあがりたてつづけにシュートを決め20分には12－0と開いた。

東女体大は機先を制されて乱れ23分高橋がどうにか持ちこんで前半の完封をまぬがれただけだった。

○……実業団に追いつけ、の掛け声も一校や二校の奮起では実るまい。女子学生界一丸となって目標に突き進まなければ何時までも陽はささない。

全日本学生、すべてに反省が必要

▽……会場から帰途につく関係者やファンは誰もが浮かぬ顔をしていた。学生界といえば自他ともに斯界の最高峰を認めていたハズ。それがなんともお寒い内容の試合に終始していたからである。

オリンピック予選の影響でかなり変則的な日程を余儀なくされたのが一因といわれる。

秋のリーグ戦、そしてこの大会と大急ぎで消化。「ゆっくり調整するヒマがなかった」と有力チームの監督は口を揃える。

▽……リーグ戦に勝つコトも大目標である以上、短い期間に二つのヤマ場を迎えることはたしかにコンディショニングが難しい。

しかし、それを凡戦連続の理由にすることは許されまい。ズバリ、質の低下である。

これにも色々の理由があるだろう。なかでも各校のかかえる部員不足はイコール層の薄さにつながる。部内の競争がないところに強チームの輩出は期待できない。

▽……大学生のハンドボール人口はむしろ増えているといわれる。だが多くは同好会に流れいわゆる体育会には入部しないのである。

古い歴史と伝統をもつ学生スポーツが一つの曲り角に来ていることを学生界の関係者は改めて話し合い〝研究〟すべきではないか。

▽……学生スポーツの最大特色を気力であるとしたら、この大会、文句なく芝浦工大を推したい。過去8回の優勝。名門の意地と執念は、部員不足をのりこえ、若手の未熟を上級生が実によくカバーしていた。

地方勢が中央勢になんとか一矢をと最後まで食い下った姿勢にも好感がもてた。当り前、といってしまえばそれまでだが、それが強く印象づけられるところに今回の低調が物語られる。

▽……女子もいぜんパッとしなかった。実力差がはっきりしすぎせりあいがない。打開の道である加盟校の増加について代表者会議で山本芳松氏（中京女大部長）が要望と同時に関係者の努力をせまったが、聞き逃すことのできぬ警鐘ではなかったろうか。

▽……大会運営もかなり危い橋を渡っていたようだ。

主力委員が1年ごとに卒業していく学連を援助するのはOBの役目である。

OBの熱意が以前よりも低くなっているとしたら……。それは競技の質の低下よりも〝おそろしいこと〟ではなかろうか。

（鏡）

東海は中京が3連勝

秋の学生リーグ戦記録続報

松山商大、4大タイトル握る

北海道

◇第3回全道学生選手権◇11月13、14日◇釧路教大球技場◇参加5校

▽リーグ戦

北海道大 24（12－3、12－6）9 北見工大
釧路教大 26（13－12、13－9）21 小樽商大
北海道大 15（7－8、8－5）13 室蘭工大
小樽商大 15（9－6、6－6）12 北見工大
室蘭工大 16（11－6、5－9）15 釧路教大
北海道大 24（18－4、6－2）6 小樽商大
室蘭工大 15（6－4、9－2）6 北見工大
北海道大 24（11－4、13－3）7 釧路教大
室蘭工大 17（11－7、6－3）10 小樽商大
釧路教大 17（10－8、7－7）15 北見工大

【順位】①北海道大4戦全勝＝3シーズン連続優勝②室蘭工大3勝1敗③釧路教大2勝2敗④小樽商大1勝3敗⑤北見工大4敗

名城、後半の反撃とどかず

東海（男子）

◇10月16日～27日◇愛知県体育館ほか◇参加1部6校 2部6校 3部4校（岐阜歯大新加盟）

▽1部

南山 16（6－5、10－1）6 名古屋大
名城 18（10－8、8－4）12 岐阜大
中京 27（13－5、14－2）7 愛知教大
名城 26（10－5、16－6）11 愛知教大
岐阜大 20（8－2、12－5）7 名古屋大
中京 15（8－4、7－7）11 南山
名城 27（13－5、14－5）10 名古屋大
中京 25（13－5、12－8）13 岐阜大
南山 20（10－8、10－7）15 愛知教大
中京 30（15－0、15－3）3 名古屋大
岐阜大 10（1－5、9－5）10 愛知教大 引き分け
名城 15（6－3、7－10）13 南山
名古屋大 12（5－5、7－4）9 愛知教大
南山 16（9－6、7－5）11 岐阜大
中京 15（9－6、6－6）12 名城

【名城】	得		【中京】	得
竹内	0	GK	福井	0
高橋	0	GK	小林	0
桑島	0	FP	長縄	3
飼沼	4	FP	小島	0
福田	2	FP	夏目	4
川口	1	FP	成田	2
阪野	0	FP	小川	2
石塚	0	FP	梶村	4
左藤	4	FP	小玉	0
松井	0	FP	渡辺	0
田中	1	FP	高橋	0
江崎	0	FP	松本	0
	12（3）	7MT		15（0）

（審・石川、松井）

【順位】①中京5戦全勝＝3シーズン連続22度目の優勝②名城4勝1敗③南山3勝2敗④岐阜大1勝3敗1分⑤名古屋大1勝4敗⑥愛知教育大4敗1分

2部は中部工大勝つ

▽2部 中部工大15－9愛知大、名工大19－12静岡大、愛知工大15－9三重大、名工大16－5愛知大、中部工大25－9三重大、静岡大15－10三重大、中部工大24－9名工大、愛知大14－11愛知工大、中部工大22－10愛知工大、三重大11－7愛知大、名工大20－10愛知工大、中部工大18－14静岡大、愛知大13－11静岡大、三重大17－9名工大、愛知工大16－14静岡大

【順位】①中部工大5戦全勝②名古屋工大3勝2敗③三重大・愛知大2勝2敗1分⑤愛知工大2勝3敗⑥静岡大5敗

▽3部 名古屋学院26－26滋賀大

(注)参加を予定された岐阜歯科大は部員の自動車事故、県立三重大はメンバー不足から棄権、3部は1試合を行っただけ

▼1～2部入れ替え戦

愛知教大（1部）19（12－6、7－7）13 中部工大（2部）

中京女、初の2連勝

東海（女子）

◇10月17日～24日◇愛知県体育館ほか、◇参加4校（岐阜大新加盟）

中京 9（6－0、3－1）1 愛知教大
中京女大 13（5－2、8－3）5 岐阜大
中京 15（10－2、5－1）3 岐阜大
中京女大 17（8－2、9－2）4 愛知教大
中京女大 17（6－6、11－2）8 中京
岐阜大 7（4－1、3－5）6 愛知教大

【順位】①中京女大3戦全勝＝2シーズン連続3度目の優勝②中京2勝1敗③岐阜大1勝2敗④愛知教大3敗

大阪体大、全勝で連覇

関西（女子）

◇10月3日～24日◇大阪府立大体育館ほか◇参加4校＝記録一部既報のため重複

大阪体大 18（7—1、11—1）2 大阪薬大
甲子園学院 21（8—0、13—1）1 大阪教大
大阪教大 14（6—2、8—2）4 大阪薬大
大阪体大 18（11—2、7—1）3 大阪教大
甲子園学院 26（11—2、15—0）2 大阪薬大
大阪体大 10（6—2、4—2）4 甲子園学院

【順位】①大阪体大3戦全勝＝2シーズン連続2度目の優勝②甲子園学院2勝1敗③大阪教大1勝2敗④大阪薬大3敗（夙川学院棄権）

目立った京都産大の健斗

関西学生男子・続報

10月3日から24日まで1〜3部各6校、4部9校によって行われ1部は春季同よう大阪経大と大阪体大が順当に勝ち星を重ね最終戦で対決、大阪経大が前半巧く主導権を握り2連勝を飾った。

1部初登場の京都産大が気力にあふれた攻守で名門各校を降して3位に食いこんだのはみごとだった。

2部は関大が復調して全勝、1部返り咲きも決めた。3部は近大、4部は京都教大が大阪薬大を破ってそれぞれ優勝。

▽1部　スコア前号速報

▽2部　関大21—14竜谷、京大27—12神大、桃山学院33—15追手門、関大13—12桃山学院、京大20—11追手門、神大23—17竜谷、関大20—13神大、桃山学院18—14京大、追手門21—14竜谷、関大19—13追手門、京大20—16竜谷、桃山学院24—12神大、追手門21—15神大、桃山学院19—15竜谷、関大18—15京大

関西学生秋季（男子1部）

	経	体	産	同	学	甲	勝	負
①大経大	…	○	○	○	○	○	5	0
②大体大	●	…	○	○	○	○	4	1
③京産大	●	●	…	○	○	○	3	2
④同志社	●	●	●	…	○	○	2	3
⑤関　学	●	●	●	●	…	○	1	4
⑥甲　南	●	●	●	●	●	…	0	5

【2部順位】①関大5戦全勝②桃山学院4勝1敗③京大3勝2敗④追手門学院2勝3敗⑤神戸大1勝4敗⑥竜谷5敗

▽3部　大阪市大16—9立命館、近畿大17—16大阪府大、大阪大24—8和歌山大、近畿大15—12大阪大、大阪市大17—15大阪府大、立命館20—9和歌山大、大阪府大24—21立命館、近畿大30—14和歌山大、大阪大16—11大阪市大、大阪大14—13立命館、近畿大27—14大阪市大、大阪府大20—10和歌山大大阪大10—7大阪府大、大阪市大25—13和歌山大、近畿大20—13立命館

【順位】①近畿大5戦全勝②大阪大4勝1敗③大阪市大3勝2敗④大阪府立大2勝3敗⑤立命館1勝4敗⑥和歌山大5敗

▽4部A組　関西外語大16—8大阪外語大、大阪薬科大34—18天理19—14大阪外語大、大阪教育大27—16大阪教育大、大阪教大20—12—10関西外語大、大阪外語大、大阪薬科大18—12　9大阪外語大、大阪教大21—17天理関西外語大、大阪外語大、大阪薬科天理23—14関西外語大、大阪薬科大36—12大阪外語大

▽同B組　京都教大34—5京都工業繊維大、京都教大27—9大阪歯大、大阪工大26—12京都工業繊維大、大阪歯大26—13京都工業繊維大、京都教大17—13大阪工大、大阪工大27—15大阪歯大

▽同7位決定戦　関西外語大12—8京都工業繊維大

▽同5位決定戦　天理18—11大阪歯科大

▽同3位決定戦　大阪工大28—16大阪教大

▽同優勝決定戦　京都教大12—6大阪薬大

中・四国

三つ巴、松山商大抜け出す

中四国学生秋季リーグ戦（第10回中四国学生選手権）は11月13、14の両日香川・高松工芸高グランドで行われ、5校が参加した1部は松山商大、山口大、広島大福山が互いに星をつぶしあった結果、優勝は得失点差にもちこまれ松山商大がプラス26で山口大、広島大福山をおさえ3シーズン連続5度目の優勝を飾った。選手権優勝は44年の第8回大会以来3年連続。

なお、松山商大は今シーズン春秋の中四国学生リーグ、第21回西部学生、四国インカレと4つのタイトルを掌中におさめた。2部（6校）は広島工大。

【順位】①松山商大3勝1敗②山口大3勝1敗③広島大福山3勝1敗④近大呉⑤広島大

【2部順位】①広島工大②岡山大③香川大④広島商大⑤愛媛大⑥山口大工学部

男子で名城が初優勝

女子は中京が4連勝

第12回愛知学生選手権は12月4日から5日間名古屋市体育館で行われ、男子は準決勝で名城大が12連勝を狙う中京大を1点差で降し、名大を破ったBチームと優勝を争い初優勝した。

女子は中京大が中京女大A、Bを連破、4年連続5度目の優勝を飾った。

＝詳報次号

京都産大初戦飾る　第1回京都産大—九州産大定期戦は11月1日京都・西京極体育館で行われ京都産大が後半一気に勝負を決め第1戦を飾った。

京都産大 23（13—10、10—4）14 九州産大

全日本総合へＡＯＫ栃木、桜丘会

全日本総合選手権（12月15～19日・東京）に全国社会人（クラブ）代表として出場する2チームの決定戦は東、西ディビイジョンに分かれて行われ東日本側はＡＯＫ栃木、西日本側は桜丘会がそれぞれ勝ちあがった。

◇

東日本ディビィジョンＡＯＫ栃木（関東・栃木）と函館有斗高ＯＢ（北海道）の試合は11月21日茨城・水海道二高体育館で行われＡＯＫ栃木が制勝、代表に決まった。

ＡＯＫ栃木 21（10―6、11―9）15 函館有斗高ＯＢ

◇

西日本ディビィジョン奈良ク（近畿・奈良）と桜丘会（東海・愛知）の試合は12月5日・奈良・畝傍高校で行われ、桜丘会が快勝代表権を握った。

桜丘会（愛知、東海） 27―23 奈良ク（近畿）

各地の記録

近畿クラブで奈良ク勝つ

第2回近畿クラブ選手権（男子のみ）は11月3、7の両日、京都・乙訓高校球技場に5県17クラブが参加してトーナメントで行われた。ベスト・フォアには予想どおり国体などに出場経験のある奈良ク2連勝を狙う佐野工ク（大阪）、地元洛東ク（京都）、城東ク（大阪）が勝ち残り、結局、決勝は奈良ク×洛東クの顔合せから奈良クがチャンスを確実に活かす巧みな試合運びで快勝、初優勝した。

▽1回戦（1試合）
洛東ク（京都） 15―9 東住吉ク（大阪）
▽2回戦
城東ク（大阪） 29―16 八幡工ＯＢ（滋賀）
奈良ク 22―14 シルビア（京都）
星友会（京都） 15―13 寝屋川ク（大阪）
篁会（京都） 18―15 デンタルズ（大阪）
佐野工ク（大阪） 20―11 島津製作ク（京都）
待兼ク（大阪） 15―14 塔南ＯＢ（京都）
ピンクインディアンズ（京都） 試合放棄（7―0） 北陽ク（大阪）
洛東ク 16―10 高島ク（滋賀）
▽準々決勝
城東ク 20（13―3、7―9）12 篁会
奈良ク 20（8―6、12―6）12 星友会
佐野工 22（8―4、14―8）12 待兼ク
洛東ク 26（12―6、14―6）12 ピンクインディアンズ
▽準決勝
奈良ク 18（9―9、9―8）17 城東ク
洛東ク 12（5―6、7―5）11 佐野工ク
▽決勝
奈良ク 22（12―7、10―6）13 洛東ク

東海は桜丘会と清水ク

第2回東海クラブ選手権は11月21、28日の両日名古屋市体育館に男子16、女子3クラブが参加して行われ、男子トーナメントは準決勝で前年1位の名城ク（愛知）が蒲郡ク（愛知）に敗れる波乱があった。

決勝は愛知同士の顔合せから名門・桜丘会（愛知）が前半の優位を活かして初優勝した。

女子は決勝リーグの結果、清水ク（静岡）が優勝。

▽男子準々決勝
名城ク（愛知） 26―16 二俣ク（静岡）
蒲郡ク（愛知） 21―6 東海ク（愛知）
清商ク（静岡） 23―11 鏡島イーグルス（岐阜）
桜丘会（愛知） 26―14 静農ク（静岡）
▽同準決勝
蒲郡ク 21―16 名城ク
桜丘会 19―10 清商ク
▽同決勝
桜丘会 17（11―3、6―11）14 蒲郡ク
▽女子決勝リーグ順位
①清水ク（静岡）②名古屋ク（愛知）清商ク（静岡）

琉球大、男女優勝成らず

▼第24回沖縄体育大会ハンドボール競技（11月・浦添高）
▽男子1回戦（1試合）
琉球大 19―15 全那覇
▽同準決勝
国頭 21―16 沖縄大
琉球大 11―9 中頭
▽同3位決定戦
中頭 20―17 沖縄大
▽同決勝
琉球大 14（9―3、5―8）11 国頭
▽女子決勝
中頭 14（8―1、6―4）5 琉球大

男子は青高クが制す

▼第11回青森県総合室内選手権（11月・青森西高）
▽男子準々決勝
青高ク 12―8 アニマルズ
大湊ク 26―3 弘前大ＯＢ
柏木農高 11―8 海猫クＢ
七戸高 14―13 カニ・ク
▽同準決勝
青高ク 14―7 大湊ク
七戸高 14―13 柏木農高
▽同決勝
青高ク 14（5―4、9―6）10 七戸高
▽女子決勝リーグ
青森西高 11―0 三本木高
三本木高 8―4 青森高
青森西高 14―0 青森高
【順位】①青森西高②三本木高③青森高

塩山商、男女ともせり勝つ

▼山梨県高校新人大会（11月・甲府市）
▽男子準々決勝
甲府一 11―7 園芸
塩山商 14―3 明誠
吉田 11―6 大月付
機山工 10―4 日川
▽同準決勝
塩山商 16―6 甲府一
機山工 6―5 吉田
▽同決勝
塩山商 11（7―3、4―6）9 機山工
▽女子準々決勝
塩山商 11―3 一商
甲府商 4―3 甲府二
山梨 6―2 長坂
日川 8―2 吉田商
▽同準決勝
塩山商 10―1 甲府商
山梨 9―3 日川
▽同決勝
塩山商 4（2―1、2―2）3 山梨

全仙台大に初の栄冠

▼第15回宮城県室内選手権（11月・仙台）

▽一般男子準決勝
白虹会 25－16 古川工OB
全仙台大 30－18 東北大

▽同決勝
全仙台大 23（7－9, 16－9）18 白虹会

全仙台大は初優勝

▽一般女子決勝リーグ
涌谷高 11－3 涌谷高OG
涌谷高 5－2 古川女高
涌谷高OG 9－7 古川女高

涌谷高は2連勝

▽高校男子準決勝
古川工 18－7 仙台一
育英 11－1 古川

▽同決勝
育英 7（1－2, 6－4）6 古川工

育英高は初優勝

育英、新人戦でも優勝

▼宮城県高校新人大会（11月・古川）

▽男子準決勝
育英 15－5 祇園寺
宮城水産 8－5 仙台一

▽同決勝
育英 17（10－1, 7－4）5 宮城水産

育英高は12年ぶり2度目の優勝

▽女子準決勝
古川女 7－4 塩釜女

▽同決勝
涌谷 10－5 祇囲寺
古川女 5（2－1, 3－3）4 涌谷

古川女高は初優勝

近大呉、広島工大を破る

▼広島県一般男子秋季選手権（11月・呉）

▽準々決勝
広島工大 棄権 三菱レ大竹
全広商大 23－18 広島教員団
近大呉 16－5 広島商大
修道ク 11－5 広島大

▽同準決勝
広島工大 15－14 全広商大
近大呉 15（分）15 修道ク

抽せんで近大呉の勝ち

▽同決勝
近大呉 16（9－6, 7－1）7 広島工大

山陽女、新人戦も好調

▼広島県高校新人大会（11月・松本商）

▽男子準々決勝
呉三津田 16－14 松本商
呉港 15－4 呉商
山陽 9－6 宮原
呉工 20－9 修道

▽同準決勝
呉三津田 16－13 呉港
呉工 10－3 山陽

▽同決勝
呉工 11（5－6, 6－3）9 呉三津田

▽女子1回戦（3試合）
進徳 3－0 豊栄
山陽女 不戦勝 白木
呉商 8－3 宮原

▽同準決勝
第一女商 8－1 進徳
山陽女 10－0 呉商

▽同決勝
山陽女 6（3－3, 3－0）3 第一女商

伝統の両校いぜん強し

▼静岡県高校新人大会（11月・富士高）

▽男子準々決勝
清水商 31－6 修善寺工
富士 7－6 浜松南
御殿場 10－8 静岡農
気賀 19－4 二俣

▽同準決勝
清水商 17－7 富士
御殿場 14－10 気賀

▽同決勝
清水商 20－10 御殿場

▽女子準々決勝
静岡城北 11－3 沼津女
浜松南 5－3 清水西
御殿場 13－2 清水女
清水商 9－1 二俣

▽同準決勝
静岡城北 9－0 浜松南
清水商 5－4 御殿場

▽同決勝
静岡城北 6－1 清水商

本田技研同士で争覇

▼第23回三重県総合選手権（11月・津高）

▽男子準々決勝
本田技研A 39－13 自衛隊久居
四日市工高 12－10 大協石油
本田技研B 10－9 日本合成ゴム
修球会 18－8 高田ク

▽同準決勝
本田技研A 18－10 四日市工高
本田技研B 18－14 修球会

▽同決勝
本田技研A 12（7－5, 5－5）10 本田技研B

▽女子準々決勝
田村紡 24－3 暁ク
津女ク 10－3 上野商高
四日市ク 13－6 四日市商高
暁高 7－5 津女高

▽同準決勝
田村紡 20－2 津女ク
暁高 9－7 四日市ク

▽同決勝
田村紡 14（6－2, 8－1）3 暁高

◇お知らせ　日本協会では全国のファンからアジア予選のプログラム譲渡の連絡をうけているが、12月10日以降先着300部に限り贈呈することになった。希望者は郵送料30円（切手）を同封して日本ハンドボール協会（東京都渋谷区神南1の1の1）に申しこめばよい。

国学院栃木高、清国産業破る

▼第19回栃木県総合選手権（11月 国学院体育館）

▽男子準々決勝
国学院栃木高A 13―4 馬題高A
足利工高B 11―10 宇都宮工高
国学院栃木高B 20―11 足利高
国学院栃木高C 21―20 清国産業

▽同準決勝
足利工高B 8―5 国学院栃木工高A
国学院栃木高C 27―17 国学院高B

▽同決勝
国学院栃木高C 25（15―6 10―7）13 足利工高B

国学院栃木高系の優勝は5度目

▽女子準々決勝
国学院栃木高B 23―5 馬頭高
小山城南高A 22―3 矢板中央高
国学院栃木高A 棄権 足利女高
小山城南高B 9―3 足利商高

▽同準決勝
国学院栃木高B 12―4 小山城南高B
国学院栃木高A 15―3 小山城南高B

▽同決勝
国学院栃木高B 7―6 国学院栃木高A

茨城は全麻生勝つ

▼第21回茨城県総合（男子）選手権（11月水海道一高）

▽準々決勝
自衛隊勝田 24―9 石岡一高
茨苑9 18―9 麻生高
茨城コンドルズ 13―7 竜崎OB
全麻生 19―9 茨城大

▽準決勝
自衛隊勝田 15―14 茨苑ク
全麻生 13―9 茨城コンドル

▽決勝
全麻生 25（14―10 11―10）20 自衛隊勝田

岡山教員、順当勝ち

▼岡山県一般男子秋季選手権（11月・岡山工）

▽1回戦（2試合）
全倉敷 17―11 天城ク
津山高専 13―4 九州耐火

▽準決勝
岡山教員 16―13 全倉敷
児島柏会 15―11 津山高専

▽決勝
岡山教員 21（6―4 12―5）9 児島柏会

高校は倉敷工と真備

▼第26回岡山県高校新人大会（11月・岡山工高）

▽男子準々決勝
津山商 13―6 勝間田
大安寺 9―4 邑久
倉敷商 10―8 児島
倉敷工 18―11 矢掛

▽同準決勝
津山商 11―3 大安寺
倉敷工 15―8 倉敷商

▽同決勝
倉敷工 13（8―4 5―4）8 津山商

▽女子1回戦（1試合）
落合 12―6 津山

▽同準決勝
真備 11―5 落合
津山商 18―4 金川

▽同決勝
真備 7（4―2 3―2）4 津山商

初芝、延長で上宮制す

▼第18回大阪府私学高校総体ハンドボール大会（11月・大阪）

▽男子準々決勝
上宮 17―4 此花商
浪商 5―4 桃山
大商 12―9 追手門
初芝 12―1 大阪学院

▽同準決勝
上宮 19―9 浪商
初芝 15―9 大商

▽同3位決定戦
大商 11―5 浪商

▽同決勝
初芝 15（9―8 4―5 …… 1―1 1―0）14 上宮

▽女子予選リーグA組順位①初芝②大阪女短大附③東大阪④梅花

▽同B組順位①住吉学園②城南③大谷④愛泉

▽同3位決定戦
城南 8―1 大女短大附

▽同決勝
住吉学園 6（2―3 4―2）5 初芝

男子で大和、女子日野が進出

▼神奈川県高校新人大会（11月・横浜）

▽男子準々決勝
一商 10―8 希望ケ丘
新城 13―1 桐蔭
湘南（通） 8―7 市川崎工
大和 5（分）5 慶応

抽せんで大和高の勝ち

▽同準決勝
新城 5―4 一商
大和 11―6 湘南（通）

▽同決勝
大和 7（3―3 4―3）6 新城

▽女子準々決勝
日野 5―2 市川崎
上溝 13―4 立野
明倫 5―4 江南
京浜 9―4 大津

▽同準決勝
日野 9―8 上溝
明倫 7―2 京浜

▽同決勝
日野 6（3―1 3―1）2 明倫

一般は日本発条が連勝

▼神奈川県秋季選手権（11月・横浜）

▽男子準々決勝
日本発条 24―11 相友ク
セントラル自動車 13―12 日進商会
防衛大 11―7 三春台ク
慶応ユニコン 10―9 桜ケ丘ク

▽同準決勝
日本発条 12―11 セ自動車
防衛大 12―7 慶応ユニコン

▽同決勝
日本発条 13（5―3 5―7 …… 0―0 3―0）10 防衛大

▽女子決勝
東ク 10（5―3 5―3）6 二俣川O

〃カメラの〃〃忘れもの〃 愛知協会は11月23日の日本対イスラエル戦（愛知県体育館）でカメラを拾得、落し主を探している。お心あたりのかたは「名古屋市東区東白壁町・県立愛知商業高校内、愛知ハンドボール協会・山田仁止＝電052―935―3441」あて問合されたい。

編集後記

〃底辺拡充〃〃ミュンヘンでの上位入賞〃この二つが来年の日本ハンドボール界の二大課題であることに誰も異論のある人はないと思います。今年もいろんなことがありました。

来年が日本のハンドボール界にとっても、ハンドボールファンのみなさんにとっても良いお年であるように……。

次号は恒例により、1・2月合併号を1月末にお届けしたいと思っています。（TF）

世界じゅうのタイプライターの
うち、10台に1台はブラザー製
110カ国に輸出されています。



ブラザー工業株式会社
ブラザーミシン販売株式会社
本社　名古屋市瑞穂区堀田通9の35
TEL大代表（811）2511

スポーツに国境がないように
世界で愛されるブラザータイプライター

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第九十三号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可
昭和四十六年十一月二十五日印刷
昭和四十六年十二月一日発行
発行所　日本ハンドボール協会
東[illegible]谷区神南一ー一ー一
電[illegible]　代表(467)三一二一
振[illegible]東京五八三四八番
編集兼発行人　保坂周助
定価百五十円
（年間購読11回・千二百円）